

環境思想論

担当教員 武田 一博

配当年次 1年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

いよいよ今年から京都議定書の約束期間に入りました。日本は2012年までに、温室効果ガスを1990年段階よりも6%削減しなければなりません。それだけでなく、その後もさらに30%、いや50%以上削減し続けることが求められています。事は温暖化防止にとどまりません。石油もあと50年ももたないとさえ言われています。地球環境や資源を守ることは、人類の存続を守ることです。いや、環境にいいことは、自分の健康にもいいことであり、環境保護は自分を守ることでもあります。授業では、具体的にどうすればよいかを考えて生きたいと思えます。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	講師自己紹介、「環境問題を考えるとは、どういうことか」
2	成績評価の方法について、環境問題とは何か
3	温暖化防止条約
4	資源枯渇の問題
5	オゾン層破壊
6	森林の消滅
7	自動車社会の問題
8	技術の問題
9	ライフ・スタイルの問題
10	ゴミ（廃棄物）の問題
11	食品添加物・農薬の問題
12	清貧・健康
13	快適で便利な生活
14	人間にとって本当の豊かさとは
15	受講生の感想・評価とレポート提出
16	

【履修上の注意事項】

私語と居眠りは、教室の外で行なってもらいます。

【評価方法】

成績は、学期末に提出するレポートで基本的に評価します。途中で課題を出すこともあります。課題提出者には、その内容に応じて、レポート評価に上乘せします。出席点は、考慮しません。

【テキスト】

とくに指定はしません。

【参考文献】

社会学概論 I

担当教員 澤田 佳世

配当年次 1年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

本講義は、社会学の基本的な概念や思考枠組を学習することからスタートし、現代社会を批判的に読み解く（社会学的想像力）と（歴史的想像力）の習得を目指す。「個人的なことから（ミクロ）」を「社会全体（マクロ）」との関わりの中で捉え、自明視されている「常識」や「カテゴリー」、様々な「現実」が歴史的に構築されたものであることを理解していく。「他者」に冷たい「常識」に流されることなく、自分自身で「問題」を発見し、それについて自分で考え判断し、未来を主体的に行動していくための暖かい批判的知性を涵養する。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	イントロダクション
2	社会学への誘い——社会学とは何か——
3	「社会」とは何か——親密性と公共性——
4	「私」って何だろう①——自己、相互行為、社会（1）——
5	「私」って何だろう②——自己、相互行為、社会（2）——
6	ジェンダーとセクシュアリティ①——性をめぐる現象とその多様性——
7	ジェンダーとセクシュアリティ②——ジェンダーとその構築性——
8	「人種」とエスニシティ——関係性としての「人種」、エスニシティ——
9	権力とは何か①——権力と社会秩序——
10	権力とは何か②——差別の複層性を考える（ビデオ鑑賞）——
11	格差と階層化——階級と階層——
12	組織と現代社会——組織、人間、環境——
13	労働と人間社会——職業と労働をめぐる差異化——
14	家族とライフコース——恋愛、結婚、家族——
15	前期のふりかえりとまとめ
16	

【履修上の注意事項】

講義内容の理解を深めるために、適宜、ビデオなどの映像資料を利用して授業を進める。

【評価方法】

リアクションペーパーの提出（平常点）、中間レポートと学期末テストの総合評価とする。

【テキスト】

毎回の授業でレジュメを配布する。基本テキストは以下の2冊。アンソニー・ギデンズ 『社会学(第4版)』(而立書房, 2006)、長谷川公一ほか『社会学』(有斐閣, 2007)。

【参考文献】

井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編 1995-1997『岩波講座 現代社会学(全26巻 別巻1)』岩波書店。その他、授業内容に応じて適宜紹介する。

社会学概論Ⅱ

担当教員 澤田 佳世

配当年次 1年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

本講義は、「社会学概論Ⅰ」で学んだ社会学の基本概念と思考枠組をふまえ、〈社会学的想像力〉と〈歴史的想像力〉を駆使しながら、グローバル化と少子高齢化の進行する現代社会の諸相を読み解いていく。グローバル化とは何か、少子高齢化とはどのような現象なのか、両者の進行過程で従来自明視されてきた国民国家や家族、ジェンダー、「人種」・エスニシティ、階級・階層といった概念/カテゴリーはどのように変化し相対化されているのか。これらを考えることで、すべての人々が排除されないオルタナティブな社会のあり方を考察する。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	イントロダクション
2	文化と再生産①——文化の力とその社会学的位置——
3	文化と再生産②——文化による再生産と排除——
4	グローバリゼーションの諸相①——メディアとコミュニケーション技術の変容——
5	グローバリゼーションの諸相②——国民国家とナショナリズムを考える——
6	グローバリゼーションとは何か①（ビデオ鑑賞）
7	グローバル化と変貌する労働の世界①——国際分業から新国際分業へ——
8	グローバル化と変貌する労働の世界②——労働力の女性化と感情労働——
9	グローバリゼーションとは何か②（ビデオ鑑賞）
10	越境者として生きるということ——「人種」とエスニシティを再考する——
11	人口変動と現代世界①——「人口爆発」とリプロダクティブ・ヘルス/ライツ——
12	人口変動と現代世界②——少子高齢化する社会とジェンダー——
13	人口変動と現代世界③——グローバル化する生殖を考える（ビデオ鑑賞）——
14	グローバル化時代の再生産領域——越境する家族とケア労働の国際移転——
15	後期のふりかえりとまとめ
16	

【履修上の注意事項】

講義内容の理解を深めるために、適宜、ビデオなどの映像資料を利用して授業を進める。

【評価方法】

リアクションペーパーの提出（平常点）、中間レポートと学期末テストの総合評価とする。

【テキスト】

毎回の授業でレジュメを配布する。基本テキストは以下の2冊。アンソニー・ギデンズ 『社会学(第4版)』（而立書房, 2006）、長谷川公一ほか『社会学』（有斐閣, 2007）。

【参考文献】

井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編 1995-1997『岩波講座 現代社会学（全26巻 別巻1）』岩波書店。その他、授業内容に応じて適宜紹介する。

フレッシュマンセミナー

担当教員 宮城 邦治

配当年次 1年

単位区分 必

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

関連資格

備考

【授業のねらい】

新入生の皆さんが社会文化学科の専門的な講義を理解できるように、「読む力」「書く力」「話す力」の醸成を目指すものである。そのために、新書レベルの図書や新聞のニュース記事、雑誌記事などを参考に、「読む」「書く」「話す」ことを通じて表現力を高めていきたい。また、ビデオなども利用しながら、人間の心象表現や異文化への理解も深めていきたい。クラスでのディスカッションや交流を通して、活字に親しみ、他人に関心を持つ学生に変身するよう期待したい。

【授業の展開計画】

- 前期) 1週：自己紹介 2週：ゼミナールの内容説明とテキストなどの決定
3～5週：新書レベル図書の読み合わせ(2～3冊)
6～8週：日本語の作文技術(1200次程度のエッセイ)
9～11週：ビデオ鑑賞(ドキュメント、異文化理解)
12～14週：日本語を楽しむ(ジョーク、ユーモア、川柳など)
15週：前期の総括
- 後期) 1～2週：夏季休暇中の報告
3～5週：新聞、雑誌記事の読み合わせ
6～8週：外国事情(旅行記など)の読み合わせ
9～11週：ビデオ鑑賞(日本文化理解)
12～14週：地域探訪(地域社会、文化、自然を知る)
15週：後期の総括

【履修上の注意事項】

登録した学生は常に活字に親しみ、他人に関心を持ち、如何に自らの意思を伝えるかを意識すること。教室に来たら自らすすんでクラスメートに関わるようにすること。読む、書く、話す力を醸成することが自らを高める礎であることを自覚すべし。

【評価方法】

与えられた図書、新聞資料、雑誌資料等の読解力と文章力、地域巡検への参加実績などを考慮して評価する。

【テキスト】

図書、新聞、雑誌などを適宜告示または配布する。異文化理解に関するドキュメント、映画なども鑑賞する。

【参考文献】

適宜、図書の告示や新聞、雑誌などの資料記事を配布する。

フレッシュマンセミナー

担当教員 江上 幹幸

配当年次 1年

単位区分 必

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

関連資格

備考

【授業のねらい】

自分で学習したいテーマを選び、研究していくためには、テーマに近づく方法を学ぶ必要がある。研究課題を選び、グループごとに「調べる」、「まとめる」、「書く」、「発表する」という行程を実践する中で、技術と方法を習得し、大学で学ぶということがどのような事なのかを理解する。

【授業の展開計画】

①30回形式：

- 第1週－4週：研究テーマの「選び方」、「調べる」、「まとめる」、「書く」、「発表する」技術と方法を教授
- 第6週－9週：グループに分かれ、テーマ選びを実践。
- 第10週－15週：第一回目の調べた内容を発表。
- 第16週－22週：第二回目の発表
- 第24週－29週：第三回目の発表
- 第30週－31週：報告書作成

【履修上の注意事項】

意欲的な授業参加を求める。

【評価方法】

授業への参加姿勢、レポートを総合的に評価する。

【テキスト】

特に指定はない。適宜レジユメを配布する。

【参考文献】

宮内泰介『自分で調べる技術』岩波アクティブ新書 2004

フレッシュマンセミナー

担当教員 上原 静

配当年次 1年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

大学生活で必要不可欠なレポートや小論文などの基本的書き方や発表の方法を学習する。

【授業の展開計画】

テキスト（レポートや小論文）の要約と発表
発表方法（話し方）の学習
新聞の社説等を読み、縮約の学習
推薦図書のリポート作成等。

【履修上の注意事項】

3分の2以上出席すること。遅刻・欠席は減点の対象とする。

【評価方法】

レポート、討議内容をもとに評価する。

【テキスト】

随時資料を配布又は指定する。

【参考文献】

フレッシュマンセミナー

担当教員 藤波 潔

配当年次 1年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

本講座は社会文化学科 1 年生を対象としたゼミナール形式の授業である。受講生が高校までの「勉強」から卒業して、大学で「学問」していく上で必要な技能の基本を修得することが、本講座の目標である。具体的には問題を発見し、資料・文献を収集し、資料・文献を読解・分析し、分析した結果を表現・発信する能力を養成する。

【授業の展開計画】

前期は、文章の読み方、書き方の技能の習得を目的とする。具体的には、文章表現の訓練をおこなうと同時に、新書レベルの文献を読み、個人ごとに割り当てられた部分の要旨報告をおこない、その報告に基づくディスカッションをおこなう。

後期は、問題の発見と解決に関する技能の習得を目的とする。具体的には、セミナー参加者の関心にあわせてグループをつくり、グループを単位とする調査・報告・討論を実施する。

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	前期ガイダンス	17	調査グループの編制
2	文献の読み方・探し方	18	調査テーマの決定
3	要旨報告の具体例	19	調査計画書の作成①
4	文章の書き方①	20	調査計画書の作成②
5	文章の書き方②	21	グループ調査①
6	文章の書き方③	22	グループ調査②
7	文章の書き方④	23	グループ調査③
8	要旨報告①	24	グループ調査④
9	要旨報告②	25	中間報告①
10	要旨報告③	26	中間報告②
11	要旨報告④	27	中間報告③
12	要旨報告⑤	28	最終報告会①
13	要旨報告⑥	29	最終報告会②
14	要旨報告⑦	30	最終報告会③
15	要旨報告⑧	31	
16	後期ガイダンス		

【履修上の注意事項】

① ゼミナール形式の授業なので、受講生の積極的な取り組みが必要である。とくに、配付資料は事前に精読することを強く求め、ゼミ内におけるディスカッションで積極的に発言することを期待する。

② 出席は毎回必ずとる。

③ 後期のグループ調査の詳細は、後期ガイダンスでおこなう。

【評価方法】

出席状況 (20%)、要旨報告の内容と文章作成技能 (30%)、グループ調査 (30%)、報告以外の時の授業への取り組み (20%) の総合評価とする。

【テキスト】

前期の要旨報告で使用する文献については、何冊かの候補の中から、ゼミのメンバーの関心に応じて設定する。

【参考文献】

テーマにあわせて適宜紹介する。

フレッシュマンセミナー

担当教員 吉浜 忍

配当年次 1年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

自らテーマを設定し、自らの頭と足で調べ、その成果となる調査報告書を作成すること。フィールドワークを実施することで、地域の歴史・文化への認識を高めると同時に、テーマ設定の動機やヒントを与える。調査や報告書作成は、前期は個人、後期はグループ（班）で取り組むことになるが、後期は内容もさることながら、発表の仕方にも創意工夫が要求される。探求心・構想力・まとめ力、そして創造豊かな表現力を養い、協力共同することの大切さを学ぶ。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	ガイダンス	17	グループ編成
2	文献検索の方法	18	調査研究テーマと日程の検討
3	調査の方法	19	フィールドワーク②
4	レポート作成	20	調査研究テーマ設定理由の発表①
5	フィールドワーク①	21	調査研究テーマ設定理由の発表②
6	個人テーマ設定	22	調査研究テーマ設定理由の発表③
7	テーマ設定理由と計画の発表①	23	グループ別調査研究
8	テーマ設定理由と計画の発表②	24	グループ別調査研究
9	各自調査研究 ①個別指導	25	中間報告会
10	各自調査研究 ②個別指導	26	グループ別調査研究
11	研究レポート発表①	27	発表会①
12	研究レポート発表②	28	発表会②
13	研究レポート発表③	29	発表会③
14	研究レポート発表④	30	後期まとめ
15	前期まとめ	31	
16	ガイダンス		

【履修上の注意事項】

- (1) 受身的や他人まかせではなく、常に知的探求心・好奇心あふれる気概をもつこと。
- (2) フィールドワークはレポート提出を義務付ける。
- (3) 1年間の期間中に開催される特別展示会の見学やシンポジウムの参加をもって講義に代えることもある。ただし、その際はレポート提出を義務付ける。
- (4) 後期の発表は、発表の仕方に工夫すること。

【評価方法】

- ①出席・態度・意欲 20点
 - ②課題レポート 20点
 - ③前期調査レポート・発表 30点
 - ④後期調査研究レポート・発表 30点
- ①+②+③+④=100点満点で評価する。

【テキスト】

自作の資料・教材をテキストとして使用する。

【参考文献】

講義のなかで適宜紹介する。

文化人類学概論 I

担当教員 稲福 みき子・石垣 直

配当年次 1年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 前期前半

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

さまざまな民族の文化や社会を知ることによって、自らの文化や社会、さらに人間についての理解を深める。異文化理解の枠組み、制度化された人間関係、儀礼や信仰のありようを扱う。

【授業の展開計画】

- 1 4月7日 文化人類学への誘い
- 2 4月14日 文化とは何か ①自文化と異文化 ②文化の概念
- 3 4月21日 異文化理解と現地調査 ①文化人類学の流れ ②B. マリノフスキーと現地調査
- 4 4月28日 人と人の結びつき 親と子・家族とは
- 5 5月12日 親族関係と親族の組織化
- 6 5月19日 儀礼の諸相 ①聖と俗 ②通過儀礼
- 7 5月26日 宗教の専門家たち シャーマニズムの世界

【履修上の注意事項】

【評価方法】

講義の内容に応じたレポート、テストを課す。

【テキスト】

講義は、毎回配布するレジュメと資料に沿って行なう。

【参考文献】

参考文献は随時、紹介する。

文化人類学概論 I

担当教員 石垣 直

配当年次 1年

単位区分 必

開講時期 前期後半

授業形態 一般講義

単位数 2.0

関連資格

備考

【授業のねらい】

さまざまな民族の文化や社会を知ることによって、自らの文化や社会、さらに人間についての理解を深める。異文化理解の枠組み、制度化された人間関係、儀礼のありかたを扱う。

【授業の展開計画】

- 8) 贈答・交換・互酬性
- 9) 分類・象徴・タブー
- 10) 宗教・死・世界観
- 11) 法・秩序・政治制度
- 12) 環境と経済
- 13) 自然・身体・ジェンダー
- 14) アイデンティティ・民族・国家
- 15) まとめ
- 16) テスト

【履修上の注意事項】

積極的な授業参加を望む。

【評価方法】

講義の内容に応じたレポート、テストを課す。

【テキスト】

講義は、毎回配布するレジュメと資料に沿って行う。

【参考文献】

参考文献は随時紹介する。

文化人類学概論Ⅱ

担当教員 江上 幹幸

配当年次 1年

単位区分 必

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

関連資格

備考

【授業のねらい】

人類がどのようにしてアフリカから旅たっていったか、人類はどのような戦略をもって世界に広がっていったのか、アジアに移り住んだ人類はどのように進化し、どのような文化を作り出したかを学ぶ。

【授業の展開計画】

15回形式：

第1週－3週	化石人類とは
第4週－10週	化石人類の発見史
第11週－13週	モンゴロイドとは
第14－15週	オーストロネシア語系の人々の暮らし
第16週	試験

【履修上の注意事項】

意欲的な授業参加を求める。

【評価方法】

授業への参加姿勢、試験、レポートを総合的に評価する。

【テキスト】

特に指定はない。適宜レジュメを配布する。

【参考文献】

三井誠『人類進化の700万年－書き換えられる「ヒトの起源」』講談社現代新書 2005年

平和学概論

担当教員 鳥山 淳

配当年次 1年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態

単位数 2.0

【授業のねらい】

この講義では、いくつかの具体的な問題に焦点を当てながら、平和学の入口を紹介していくことにしたい。いま沖縄で問われ続けていることを出発点としつつ、一方では世界に視野を広げ、他方で身近な暴力性を問い直すことによって、平和学の広がり理解することをめざしている。そして、社会的な取り組みの場に足を運び何かを感じ取ることも、平和学の重要な要素である。レポートの課題を通して、そのきっかけをつかむようにしたい。

【授業の展開計画】

- 第1回 平和学の入口
- 第2回 沖縄のいまを見つめる① なぜ沖縄に基地があるのか
- 第3回 沖縄のいまを見つめる② 15年前の異議申し立て
- 第4回 沖縄のいまを見つめる③ ヘリ墜落事件と「県内移設」
- 第5回 レポートに向けた解説
- 第6回 戦争の傷痕に向き合う① 問われ続ける沖縄戦
- 第7回 戦争の傷痕に向き合う② 体験を語る・聞く
- 第8回 戦争の傷痕に向き合う③ 体験を伝える
- 第9回 レポートに向けた解説
- 第10回 戦争の世紀を振り返る① 総力戦と大量殺戮
- 第11回 戦争の世紀を振り返る② 「冷戦」と軍拡競争
- 第12回 戦争の世紀を振り返る③ 東アジアの視点で考える
- 第13回 社会と軍隊① 軍隊と性暴力
- 第14回 社会と軍隊② 人はどうやって兵士になるのか
- 第15回 社会と軍隊③ 貧困と軍隊
- 第16回 学期末テスト

【履修上の注意事項】

小レポート作成のために、授業日以外の取り組み（1日）が必要となることを承知しておくこと。

【評価方法】

学期末テスト40%、レポート30%、参加姿勢30%

【テキスト】

特定のテキストは使用せず、必要な資料は教室で配布する。

【参考文献】

石原昌家ほか編『沖縄を平和学する！』（法律文化社、2005年）
黒澤亜里子編『沖国大がアメリカに占領された日』（青土社、2005年）

歴史学概論

担当教員 藤波 潔

配当年次 1年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

「歴史は暗記すれば良い」とか「過去の出来事を学んでも意味がない」という声を聞く。また、歴史小説や歴史漫画がすべて歴史的事実だと誤解している者も多い。本講義では、人間が過去の出来事をどのように認識してきたのかについて考察した上で、歴史認識にとって不可欠な史料の問題、歴史認識の共有をめぐる問題について検討する。これにより、歴史を学ぶことの意義を学ぶと同時に、歴史と文学等との違いを理解することを目的とする。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	ガイダンス
2	歴史認識のあり方①（ギリシア・ローマ①）
3	歴史認識のあり方②（ギリシア・ローマ②）
4	歴史認識のあり方③（ヨーロッパ中世）
5	歴史認識のあり方④（ルネサンス）
6	歴史認識のあり方⑤（啓蒙主義の時代）
7	歴史認識のあり方⑥（近代歴史学とロマン主義）
8	歴史認識のあり方⑦（唯物史観とアナル派）
9	歴史認識のあり方⑧（現代の歴史学）
10	歴史史料論①（史料の種類・解釈）
11	歴史史料論②（史料の保存）
12	歴史認識の共有と「歴史問題」①（ヨーロッパの事例①）
13	歴史認識の共有と「歴史問題」②（ヨーロッパの事例②）
14	歴史認識の共有と「歴史問題」③（アジアの事例①）
15	歴史認識の共有と「歴史問題」④（アジアの事例②） ※ 16回目に後学期末試験を実施する
16	

【履修上の注意事項】

- ① 本講義は社会文化学科 1 年次対象の必修科目である。
- ② 他学部・他学科の学生でも、歴史学に興味のある意欲のもった学生であれば歓迎する。
- ③ 原則として追試験・再試験は実施しない。

【評価方法】

出席状況（30%）と論述式の期末試験（70%）による総合評価とする。

【テキスト】

特定のテキストは使用せず、レジュメを配付する。

【参考文献】

適宜紹介する。

アジア文化概論 I

担当教員 石垣 直

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

よく「日本とアジア」といったテーマを耳にすることがある。それでは果たして「日本」とは何なのか、「アジア」とは何なのか、そしてわたしたちが住む「沖縄」とどのような関係があるのか？ 本講義では、さまざまな「アジア」社会にかんする基本的な知識を理解したうえで、そこにみられる差異と共通点について考えていくことを目標とする。

【授業の展開計画】

- ①ガイダンス
- ②「アジア」とは何か
- ③中国の社会と文化（1）
- ④中国の社会と文化（2）
- ⑤中国の社会と文化（3）
- ⑥中国の社会と文化（4）
- ⑦映像鑑賞
- ⑧朝鮮半島の社会と文化（1）
- ⑨朝鮮半島の社会と文化（2）
- ⑩映像鑑賞
- ⑪日本の社会と文化（1）
- ⑫日本の社会と文化（2）
- ⑬映像鑑賞
- ⑭東アジア世界と日本
- ⑮まとめ

【履修上の注意事項】

毎回授業の際に、出席確認をかねて、受講生にレスポンス・ペーパーを配布し、授業に対する感想・質問・意見などを受け付ける。なお、他の受講生の学習を妨害するような言動があった場合には、退席を要求することもあるので注意されたい。

【評価方法】

出席（60％）、レポート（40％）
授業への出席および積極的な授業態度を重視する。その上で、授業中あるいは学期末に提出してもらうレポートの内容を加味し、総合的な評価をだす。

【テキスト】

特になし。（毎回の講義ではレジюмеおよび資料を配布する）

【参考文献】

講義中に適宜紹介する。

アジア文化概論Ⅱ

担当教員 石垣 直

配当年次 2年

単位区分 選必

開講時期 後期

授業形態 演習

単位数 2.0

関連資格

備考

【授業のねらい】

よく「日本とアジア」といったテーマを耳にすることがある。それでは果たして「日本」とは何なのか、「アジア」とは何なのか、そしてわたしたちが住む「沖縄」とどのような関係があるのか？ 本講義では、前期講義「アジア文化概論Ⅰ」で学んだ内容をもとに、台湾や東南アジア地域および南アジア地域のさまざまな「文化」のありようを参照点としながら、「日本文化」や「沖縄文化」について理解を深めることを目標とする。

【授業の展開計画】

- ①ガイダンス
- ②台湾の歴史と文化
- ③台湾のオーストロネシア語族系住民（1）
- ④台湾のオーストロネシア語族系住民（2）
- ⑤台湾のオーストロネシア語族系住民（3）
- ⑥映像鑑賞
- ⑦東南アジアの社会と文化（1）
- ⑧東南アジアの社会と文化（2）
- ⑨南アジアの社会と文化
- ⑩映像鑑賞
- ⑪華僑・華人の社会と文化
- ⑫沖縄の社会と文化（1）
- ⑬沖縄の社会と文化（2）
- ⑭アジアのなかの沖縄文化
- ⑮まとめ

【履修上の注意事項】

毎回授業の際に、出席確認をかねて、受講生にレスポンス・ペーパーを配布し、授業に対する感想・質問・意見などを受け付ける。なお、他の受講生の学習を妨害するような言動があった場合には、退席を要求することもあるので注意されたい。

【評価方法】

出席（60％）、レポート（40％）
授業への出席および積極的な授業態度を重視する。その上で、授業中あるいは学期末に提出してもらうレポートの内容を加味し、総合的な評価をだす。

【テキスト】

特になし。（毎回の講義ではレジюмеおよび資料を配布する）

【参考文献】

講義中に適宜紹介する。

沖縄前近代史 I

担当教員 田名 真之

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

近世琉球の社会と構造について考察する。王府の公布した原史料、翻刻史料を用いて、往時の社会について見ていく。翻刻された候文がある程度読めて、理解できるよう指導する。史料は『琉球王国評定所文書』から「進貢船仕出日記」など予定。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	総論
2	史料概要
3	史料講読一講義
4	史料講読 //
5	史料講読 //
6	史料講読 //
7	史料講読 //
8	史料講読 //
9	史料講読一個々に割り当てての読み、内容報告
10	史料講読 //
11	史料講読 // 小テスト
12	史料講読 //
13	史料講読 // 小テスト
14	史料講読 //
15	史料講読 16回目テストを行います。
16	

【履修上の注意事項】

1. 古文書（候—そろろう—文）を中心に漢文史料（主に読み下し文）にも触れる。
2. 遅刻しないこと。質問は積極的に。
3. 前、後期通して履修することが望ましい。

【評価方法】

学期末の試験と適宜の小テスト、出席状況、受講態度で評価

【テキスト】

関連資料のプリントを配布

【参考文献】

講義の中で適宜紹介する

沖縄前近代史Ⅱ

担当教員 田名 真之

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

近世琉球王国の社会とその構造について考察する。具体的には前期に引き続き、王府関連の古文書(候文)を読む。原文書、翻刻文書を読むことを通して往時の社会と人々の生活を考える。予定「伊江親方日日記」など。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	総論
2	講読史料の概要
3	史料講読 — 講 義
4	史料講読 //
5	史料講読 //
6	史料講読 //
7	史料講読 //
8	史料講読 一個々に割り当てて、読みと内容報告
9	史料講読 //
10	史料講読 // 小テスト
11	史料講読 //
12	史料講読 // 小テスト
13	史料講読 //
14	史料講読 // 小テスト
15	史料講読 16回目にテストを行います。
16	

【履修上の注意事項】

1. 古文書(そうろう文—主に釈文)を中心に漢文史料(主に読み下し文)にも触れる。
2. 遅刻はしないこと。質問は積極的に。
3. 前、後期通して履修することが望ましい。

【評価方法】

学期末試験と適宜の小テストの結果及び出席、受講態度で総合的に評価する

【テキスト】

関連資料のプリントを配布する

【参考文献】

講義の中で適宜紹介する

沖縄文化論特講 I

担当教員 津波 高志

配当年次 2年

単位区分 選択

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

講義の目的：琉球弧全域を見渡す民俗学の概論書はいまだ世に現れていない。この講義ではそのことを前提にしつつ、制度化された人と人との関係を切り口にして「沖縄」の民俗文化を鳥瞰する。と同時に、民俗学や社会人類学を学ぶ学生たちが今後取り組むべき研究課題についても一つ一つその脈絡のなかで明らかにする。

【授業の展開計画】

- 第1部 基本的概念
- 第1回 「沖縄」とは
- 第2回 「民俗社会」とは
- 第3回 「奄沖」の歴史と言語

- 第2部 村落と家族・親族
- 第4回 村落の歴史と景観
- 第5回 村落の仕組み
- 第6回 家族の構造
- 第7回 二種の親族
- 第8回 二種の親族

- 第3部 民俗宗教
- 第9回 共同体の祭祀
- 第10回 ノロ制度
- 第11回 家族・親族の祭祀
- 第12回 シャマニズム
- 第13回 シャマニズム

- 第4部 変貌する民俗社会
- 第14回 変貌の諸要因
- 第15回 変貌の中の奄美と沖縄
- 第16回 まとめ

【履修上の注意事項】

【評価方法】

出席とレポートで行う。

【テキスト】

特になし。

【参考文献】

沖縄文化論特講Ⅱ

担当教員 上江洲 均

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

本講義では、沖縄文化に関するテーマを総括的に取り上げて紹介し、検討を加える。沖縄の優れた工芸技術、独特の文学・芸能についても触れる。必要に応じて日本本土や東アジア諸国（韓国・台湾）との比較の視点でとらえ、進めていく。

【授業の展開計画】

第1週	ガイダンス
第2週	海・黒潮の文化
第3週	稲の道
第4週	ムラの成り立ち
第5週	〃 〃
第6週	イエ（家族・隠居・相続）
第7週	〃 〃
第8週	琉球文学（古謡）
第9週	〃（琉歌）
第10週	沖縄の工芸（染・織・陶器・漆器）
第11週	沖縄の住い・沖縄の食文化
第12週	人生儀礼
第13週	葬墓制（墓・厨子甕）
第14週	沖縄の地名
第15週	テスト

【履修上の注意事項】

【評価方法】

出席状況及び期末テスト（又は課題レポート）により評価する。

【テキスト】

プリントを用意する。

【参考文献】

宮田 登他編『民俗探訪事典』（山川版社）
上江洲均著『沖縄の祭りと年中行事』（2008、榕樹書林）

家族社会学 I

担当教員 具志堅 邦子

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

本講義では、家族を社会的に分析できる力をつける。

【授業の展開計画】

1. 家族を考える視点
2. 家族の「いま」
3. 家族の構造・幻想 (1)
4. " (2)
5. 女と男と子どもの近代 (1)
6. " (2)
7. 近代的ジェンダーと家族 (1)
8. " (2)
9. つくられた〈母性愛〉 (1)
10. " (2)
11. アディクションと家族 (1)
12. " (2)
13. " (3)
14. さまざまな家族のカタチ
15. これからの家族
16. 課題

【履修上の注意事項】

毎回の積み重ねが不可欠なので、欠席しないように。
 なお毎回の講義時に配付する資料は、次回に持ち越して配布しない。

【評価方法】

出席、リアクション・ペーパー、課題等から総合的に評価する。

【テキスト】

特になし。必要に応じて資料を配布する。

【参考文献】

講義時に随時紹介する。

家族社会学Ⅱ

担当教員 具志堅 邦子

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

本講義では、家族を社会的に分析する力をつける。特に「日本」の家族と「沖縄」の家族に焦点を当てる。

【授業の展開計画】

1. 家族を考える視点
2. 家族の「いま」
3. ジェンダー (1)
4. " (2)
5. 日本における性愛と婚姻の変化 (1)
6. " (2)
7. " (3)
8. 経済変動と家族 (1)
9. " (2)
10. 沖縄の家族 (1)
11. " (2)
12. " (3)
13. " (4)
14. 消費型社会と家族 (1)
15. " (2)
16. 課題

【履修上の注意事項】

毎回の積み重ねが不可欠なので欠席しないように。
なお毎回の講義時に配布する資料は次回に持ち越して配布しない。

【評価方法】

出席、リアクション・ペーパー、課題等から総合的に評価する。

【テキスト】

特になし。必要に応じて資料を配布する。

【参考文献】

講義時に随時紹介する。

環境法

担当教員 砂川 かおり

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

環境問題は公害から生活環境問題、さらに将来世代の持続可能な発展を求める地球規模の問題へ拡大しています。環境法とは、環境の質を社会的に望ましい状態にするための法システムの総称です。つまり、現在および将来の環境の質の状態に影響を与える関係主体の意思決定を社会的望ましい状態の実現に向けてのアプローチに関する法、および、環境に関する紛争処理に関する法律です。

【授業の展開計画】

本講義では、環境法に係るこれまでの理論的蓄積やアプローチ、判例等を学びながら、環境法に関する諸課題について理解を深め、問題点の抽出、解決方法等について考え、分析できる能力を身に付けることを目的としています。

1. 日本の公害・環境法の歴史
2. 環境問題と環境法の特色・体系
3. 環境法の基本理念・原則、各主体の役割
4. 環境政策の手法（経済的手法、自主的取組と情報的手法）
5. 環境基本法と環境基本計画
6. 環境規制と法
7. 環境影響評価に関する法
8. 有害化学物質管理法
9. 汚染排出の防止・削減に関する法
10. 循環管理法
11. 自然・文化環境保全法
12. 環境保護の費用負担
13. 公害・環境事件の司法・行政的解決
14. 地球環境問題に関する条約と国内的対応
15. まとめ
16. 試験

【履修上の注意事項】

【評価方法】

出席・レポート・期末試験により評価します。
評価配分：出席点30%、レポート20%、期末試験50%

【テキスト】

畠山武道・大塚 直・北村喜宣「環境法入門」（日本経済新聞出版社）

【参考文献】

大塚直「環境法」（有斐閣）、大塚直・北村喜宣「環境法ケースブック」（有斐閣）、「ジュリスト別冊、公害環境判例百選」（有斐閣）、その他 適宜プリント等配布。

外国平和研究事情

担当教員 ダグラス トライスタット

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

【授業の展開計画】

【履修上の注意事項】

【評価方法】

【テキスト】

【参考文献】

基礎演習

担当教員 稲福 みき子

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

民俗調査についての基本的な知識と方法論、調査資料の整理分析、調査報告書の編集・作成について学習する。とくに、民俗学の伝統的なアプローチである「参与観察」の体験学習を通じて、民俗文化についての理解を深める。民俗実習を経て、報告書『民俗研究37号』を発行する。

【授業の展開計画】

前期

- 1 科目についてのオリエンテーション
- 2 トレーニング・プログラム班の編成
- 3 斎場御岳について（第1班）
- 4 第1班現地発表
- 5 門中墓について（第2班）
- 6 トレーニング・プログラムの総括
- 7 実習地の決定
- 8 実習テーマの設定と事前学習
- 9～13 調査レジュメの発表
- 13～15 調査実施計画確定

後期

- 1 調査の総括と感想
- 2 調査報告の記述要項
- 3 調査写真・映像のチェック
- 4 調査資料の整理
- 5 調査報告の作成と発表（班別）
- 6 //
- 7 //
- 8 //
- 9～13 報告書の修正
- 13～15 調査報告書の編集・印刷・製本

【履修上の注意事項】

民俗学実習と同時に履修すること。グループ学習を積極的に行うこと。

【評価方法】

- ①出席を重視する。
- ②レジュメのまとめ、発表力、調査力、報告書の内容、ゼミへの貢献度等、総合的に評価する。

【テキスト】

講義の中で適宜紹介する。

【参考文献】

基礎演習

担当教員 宮城 邦治

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

環境学を学ぶ学生のための基礎演習で、沖縄県の島嶼的特性を環境的視点で捉えていくものである。沖縄の地域は地理的な「島」と社会的な「シマ」という視点で捉えると実に多様な社会が浮かび上がってくる。私たちが知りうる「島」と「シマ」の歴史、文化、社会は実に微小であるが、鳥瞰する視点と等身大の思考で地域を見据えるならば、私たちの認識を超える「島」と「シマ」の現況が浮かび上がってくると考える。そんな琉球（沖縄）への理解を深化させていきたい。

【授業の展開計画】

前期) 「島」と「シマ」に関する自然、社会、文化などの図書、資料などの読み合わせを中心に、今後の調査テーマを考えさせる。

学生の能力と関心に合わせて試行錯誤をしながら調査テーマを選び出していく。
各週ごとに2～3名程度に資料などの報告をさせ、テーマは絞り込むようにする。
その間、地域巡検（実習）を数回実施する。

後期) 前期で絞り込んだ調査地域とテーマに関する資料などの読み合わせを行う。
各週ごとに2～3名程度に資料などの報告をさせる。
その間、決定された調査地域とテーマに関する巡検を数回実施する。

【履修上の注意事項】

環境学を専攻する学生は自らが立脚する状況を、環境的視点すなわち「鳥瞰する視点」と「等身大での思考」を心掛けることが重要である。注意深く興味をもって「島」であり「シマ」でもある「地域」を解きほぐしていく心意気をもって欲しい。なお、当然ながら「実習」にも積極的に参加することが肝要である。

【評価方法】

実習への参加、レポートの提出などを勘案して評価する。

【テキスト】

調査地、テーマなどが決定した際に関連するテキスト、資料などを告示または配布する。

【参考文献】

調査地、テーマなどが決定した際に告示また配布する。

基礎演習

担当教員 上原 静

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

遺跡を実際に発掘することによって、調査の方法を学ぶ。そして、一度発掘してしまうと、遺跡は再び元に戻らない。このことを十分認識し、発掘に際しては周到な計画と細心の注意が必要なことを理解してもらう。そうすることによって、報告書作成の意義を認識してもらう。

【授業の展開計画】

考古学の性格、遺跡と遺物、土器、石器、木器、貝器等の遺物について学習、発掘調査における記録技術、発掘遺物の洗浄と土器型式の発表（レポート）、遺物の実測図作成等を行う。

【履修上の注意事項】

- 1、夏期集中講義（発掘実習）に必ず参加する。
- 2、実習は技術の習得に力点を置くので、講義時間以外にも遺物の整理に従事する。

【評価方法】

レポートを数回、随時に課す。
遅刻・欠席は減点の対象とする。

【テキスト】

藤本強『考古学を考える』雄山閣出版 1996・江上波夫監修『考古学ゼミナール』山川出版 1976・文化財保護委員会『埋蔵文化財発掘調査の手引き』国土地理協会 1967

【参考文献】

文化財保護委員会『文化財保護必携』第一法規 1968・甘粕 健編『地方史と考古学』柏書房 1977
甘粕 健編『考古資料の見方（遺跡編）』柏書房1977・甘粕 健編『考古資料の見方（遺物編）』柏書房1997

基礎演習

担当教員 田名 真之

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

沖縄戦後史の基本的な流れを学ぶとともに、文献や史料に関する知識を養い、史料の読み方、史料の収集方法について学ぶ。併せてグループでテーマを設定して、史料を収集し、分析、整理して報告書にまとめるまでの一連の過程を体験させる。

【授業の展開計画】

前期

1. 琉球・沖縄史と戦後史の概要
2. 基本的文献、史料について
3. 史料の所在－資料保存機関訪問
4. 基本文献(戦後史)の講読
5. 実習調査の設定
調査方法の検討
調査体制－班の編成
調査計画

後期

1. 調査の整理
関係史料の収集
調査報告書案の作成
2. 調査報告発表－批評
3. 報告書の修正、整理
4. 報告書の編集

【履修上の注意事項】

調査、報告など班(グループ)単位となるので、グループで学習するなどチームワークを養うこと。

【評価方法】

出席、調査への取り組み、報告書の内容等で総合的に評価する

【テキスト】

プリントを配布。

【参考文献】

参考文献は適宜紹介する。

基礎演習

担当教員 澤田 佳世

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

本授業では、質的調査の基本概念を学習し、調査企画から報告書作成に至るインタビュー法の一連のプロセスを実践的に学ぶ。本授業の主要テーマは「沖縄の社会問題とその現代的課題」である。少子高齢化とグローバル化が進行する中で、複雑化・多様化する沖縄の社会問題とその現代的課題について、インタビュー法を中心に現地調査によって現実的・多角的に理解する。その際、女性・高齢者・移住者・子ども・障がい者など社会的マイノリティの視座に立ち、人々が生きる社会関係と現代沖縄社会が抱える構造的問題を多面的・複眼的に捉えていく。

【授業の展開計画】

調査の実施に先立ち、社会問題を分析する社会学の諸理論と、沖縄の社会問題に関する先行研究を整理し、基礎的知識を身につける。その後、関心のあるテーマ（性・生殖、家族、介護・育児、労働、医療・福祉、文化、ジェンダー、エスニシティ、その他の社会問題）ごとにグループをつくり、グループごとに調査の企画・設計、仮説と調査項目の設定、インタビューガイドの作成、調査対象者と地域の選定、インタビュー法による調査の実施、収集したデータのコーディングと分析、報告書の作成を行う。

【前期】

- 第1回：ガイダンス
- 第2・3回：社会問題の社会学
- 第4・5回：沖縄における社会問題とその現代的課題
- 第6・7回：テーマ設定とグループ分け
- 第8・9回：調査の企画・設計、問題の所在の整理
- 第10・11回：仮説と質問項目の検討
- 第12・13回：インタビューガイドの作成
- 第14・15回：調査対象者と地域の選定

【後期】

《夏期集中講座》 インタビュー調査の実施

- 第16・17回：夏期集中の本調査に続く補足調査の実施
- 第18・19・20回：調査結果の整理と集計
- 第21・22・23回：調査結果の分析と解釈
- 第24・25回：調査結果の記述
- 第26・27回：調査結果の発表
- 第28・29・30回：調査報告書の作成

【履修上の注意事項】

- ①調査地と調査項目は学生の関心を優先して決定する。
- ②学生は、調査地域および対象者に不快感を与えないよう、調査倫理に則った節度のある行動を要する。
- ③各自、録音機器やデジタルカメラ、ノート（フィールドノート用）など調査に必要な道具・機材を用意することが望ましい。ただし、ICレコーダーは各グループに1台貸し出す。

【評価方法】

出席（討論への参加姿勢を含む）、調査実習の取りくみ、調査結果の発表、調査報告書の内容で総合的に評価する。

【テキスト】

佐藤郁哉, 2006, 『フィールドワーク（増訂版）——書を持って待ちへ出よう——』新曜社。
R.M. エマーソンほか, 1998, 『方法としてのフィールドノート——現地取材から物語作成まで——』新曜社。

【参考文献】

佐藤郁哉『実践フィールドワーク入門』、桜井厚ほか編『ライフストーリー・インタビュー』、戈木クレイグヒル滋子『グラウンデッド・セオリー・アプローチ』など、その他講義の中で適宜提示する。

基礎演習

担当教員 鳥山 淳

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

この講義の全体のテーマは、沖縄社会の歩みと現状に向き合いながら、その現実を変革する可能性について考えることである。夏期に行う実習に向けて調査の目的や手法を共有し、実習後には調査の成果を活かして報告書を作成する。その過程で、具体的な地域や問題を選んで調査計画を立て、必要とされる知識や手法を身につける。実習後は、その内容を報告書にまとめる作業に取り組み、整理・分析・表現の手法を身につける。

【授業の展開計画】

前期

基地問題の基本的な経緯の把握

調査する地域を知るための事前学習（資料の収集と要約）

聞き取り調査の手法および心がけの学習

調査の依頼と事前調整

後期

調査記録の整理

報告書の基本構想の作成

報告書の作成と印刷

【履修上の注意事項】

夏期の実習とともに、1年を通して積極的に取り組むこと。

【評価方法】

出席と取り組み姿勢によって評価する。

【テキスト】

指定しない。

【参考文献】

必要に応じて紹介する。

基礎演習

担当教員 石垣 直

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

本演習の目的は、社会・文化人類学の根幹をなす「参与観察」を通じて、対象社会・テーマ・トピックに対する理解を深め、その調査・研究成果を整理・分析し、論文としてまとめる手法を学ぶことにある。前期にはレジュメ作成の技術、調査テーマや参与観察の手法などにかんする知識を増やす。後期には夏期休暇中にゼミ全体で実施する現地調査の成果を各自が発表して質疑応答を行い、最終的には調査成果報告書を作成する。調査テーマに関してはゼミでの議論を通じて設定するが、基本的には沖縄本島各地の儀礼および祭を対象とする予定である。

【授業の展開計画】

(前期)

- ①オリエンテーション、自己紹介 (第1回)
- ②レジュメ作成方法・発表方法 (第2回)
- ③調査テーマの設定 (第3回)
- ④各ゼミ生によるレジュメ作成・論文購読・質疑応答 (第4～11回)
- ⑤参与観察の目的・意義・手法 (第12回)
- ⑥調査計画の策定 (第13、14回)
- ⑦調査実施 (夏期休暇中) にむけた質問項目および仮説の検討 (第15、16回)

(後期)

- ⑧各ゼミ生の調査成果にかんする発表 (第17～26回)
- ⑨各ゼミ生の調査成果発表に対する質疑応答 (第17～26回)
- ⑩調査成果とゼミでの議論をもとにした論文作成 (第27～30回)
- ⑪調査成果報告書の編集・発行 (第31、32回)

【履修上の注意事項】

通常の講義科目とことなり、演習では各ゼミ生のより一層の主體的参加が求められる。文献研究やゼミでの発表・質疑応答を通じて、ゼミ全体としての共通テーマのもとで各ゼミ生の問題意識を深化させてほしい。

【評価方法】

出席 (50%)、授業への参加姿勢 (25%)、調査成果・論文評価 (25%)。
出席および演習への参加姿勢を重視する。その上で、調査成果や論文の完成度合いに応じて総合的に評価する。

【テキスト】

演習のなかで適宜紹介。

【参考文献】

演習のなかで適宜紹介。

考古学概論 I

担当教員 後藤 雅彦

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

考古学とは何か。考古学で扱う資料を通して、先史時代の人々がどのような環境で暮らしていたかを学ぶ。人間行動の産物である物質文化は遺跡や遺物に反映している。その機能を判定するために考古学、民族学、民俗学を援用して行う。これらをどのようにして利用していくかを学ぶ。

【授業の展開計画】

15回形式：

第1週～3週	考古学とは何か。
第4週～6週	考古学史
第7週～9週	旧石器時代の暮らし
第10週～13週	縄文時代の暮らし
第14週	まとめ
第15週	試験

【履修上の注意事項】

意欲的な授業参加を求める。

【評価方法】

授業への参加姿勢、試験、レポートを総合的に評価する。

【テキスト】

特に指定はない。適宜レジユメを配布する。

【参考文献】

藤本強『考古学を考える』雄山閣 1994・藤本強『ごはんとパン』同成社 2007・松井章『環境考古学への招待』岩波新書 2005

考古学概論Ⅱ

担当教員 江上 幹幸

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

北の北海道から南の南島まで、南北に長い日本列島がもつ様々な気候帯。先史時代の人々はそのような異なった自然環境の中でさまざまな生活を営んでいる。アジアの中で、日本の先史時代がどのような生業を生み出し、アジアの地域と関わって来たかを最新の発掘資料から概説する。

【授業の展開計画】

15回形式：

第1週～	2週	縄文時代とは
第3週～	5週	縄文時代の時期区分
第6週～	8週	縄文人の暮らし
第9週～	11週	縄文人の食生活
第12週～	14週	アジアの中の縄文文化
第15週		まとめ
第16週		試験

【履修上の注意事項】

意欲的な授業参加を求める。

【評価方法】

授業への参加姿勢、試験、レポートを総合的に評価する。

【テキスト】

特に指定はない。適宜レジュメを配布する。

【参考文献】

阿部芳郎『縄文の暮らしを掘る』岩波ジュニア新書 2002・松井章『環境考古学への招待』岩波新書 2005・藤本強『ごはんとパン』同成社 2007

古文書講読 I

担当教員 深澤 秋人

配当年次 2年

単位区分 選必

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

関連資格

備考

【授業のねらい】

文字で表記された文献史料は、①文書、②記録、③編纂物や典籍に区分されます。①に位置する古文書は、意味内容とともに、形態・様式・機能・伝来など、豊富な歴史情報を持っています。しかし、文字（くずし字）や文章（和様漢文・候文）が読めなければ、内容を理解することはもちろん、その背景に広がる歴史世界を考えることはできません。この講義のねらいは、くずし字や和様漢文に慣れ親しみ、ある程度読めるようになることです。文章中の動詞の主語を押さえ、文章の主旨を把握できるようになることが到達目標です。

【授業の展開計画】

皆さんと読み進める史料は「琉球藩在勤来翰」（外務省外交史料館蔵）です。1873年に明治政府が那覇に設置した外務省出張所と琉球側とのあいだでやりとりされた文書を外務省側でファイルしたものです。

1873年は明治天皇によって琉球藩が設置された翌年にあたります。時代の転換期といえる時期の史料の内容を考えながら読んでいきましょう。ちなみに、くずし字の形には若干の個人差はあっても地域差はありません。

- 1) 文書と記録と編纂物の違いについて具体的に説明します。
- 2) 1870年代前半の時代背景を解説し、「琉球藩在勤来翰」の解題をします。
- 3) 活字化されている関連史料（『日本外交文書』）を読み、和様漢文に慣れます。
- 4) 「琉球藩在勤来翰」の一部を全員で協力して読み、くずし字に慣れます。
- 5～14) 各人に割り当てた「琉球藩在勤来翰」の担当箇所を読んでもらいます。
- 15) 期末試験

【履修上の注意事項】

くずし字に慣れ親しむためには、和様漢文の文章を声を出して量を読むことが大切です。はじめて外国語を勉強する新鮮な気持ちで講義に参加してください。はじめからくずし字や和様漢文をスラスラ読める人は絶対にいません。それだけに、少しずつ慣れてきて読めるようになるととても楽しいですよ。あきらめないでください。歴史学を専攻する方はもちろんのこと、民俗学・文化人類学・考古学を専攻する方もくずしが読めれば鬼に金棒です。興味を持った方は安心して教室に来てください。お待ちしております。

【評価方法】

基本的には期末試験の結果で評価します。試験問題は、①くずし字の読解、②和様漢文の読み下しです。ほかにも、くずし字や和様漢文を読めるようになりたいという意欲の有無、講読史料の担当箇所に取り組む姿勢を重視します。場合によっては加減点することがあります。

【テキスト】

皆さんと講読する「琉球藩在勤来翰」は1回目の講義で配布します。また、必要に応じてレジュメを配布します。

【参考文献】

林英夫・若尾俊平編『増訂 近世古文書解読辞典』（柏書房、1972年）、ほかにも、くずし字を調べるための字典などについては1回目の講義で紹介いたします。

古文書講読Ⅱ

担当教員 深澤 秋人

配当年次 2年

単位区分 選必

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

関連資格

備考

【授業のねらい】

文献史料のなかでも文書に含まれる古文書は、豊富な歴史情報を持っています。しかし、文字（くずし字）や文章（和様漢文・候文）が読めなければ、内容を理解することはもちろん、史料の背景に広がる歴史世界を考えることはできません。この講義のねらいは、皆さんがくずし字や和様漢文を読めるようになり、そのうえで和様漢文の文章の意味を理解できるようになるところにあります。文章を現代語訳できるようになることが到達目標です。

【授業の展開計画】

古文書講読Ⅰに引き続き「琉球藩在勤来翰」（外務省外交史料館蔵）を受講生の皆さんと読み進めます。史料の性格などについては古文書講読Ⅰの【授業の展開計画】で触れています。

- 1) 1870年代前半の時代背景を解説し、「琉球藩在勤来翰」の解題をします。
- 2) 活字化されている関連史料（『日本外交文書』）を読み、和様漢文に慣れます。
- 3) 「琉球藩在勤来翰」の一部を全員で協力して読み、くずし字に慣れます。
- 4～14) 各人に割り当てた「琉球藩在勤来往翰」の担当箇所を読んでもらいます。
- 15) 期末試験

【履修上の注意事項】

前期の古文書講読Ⅰではくずし字や和様漢文に慣れ、読めるようになることを目指します。古文書講読Ⅱではそのうえで文章の意味を理解できるようになることを目指します。古文書講読Ⅱから履修することも可能ですが多少の努力が必要です。できれば古文書講読Ⅰから連続して履修することをおすすめします。

履修するうえでのアドバイスについては古文書講読Ⅰの【履修上の注意事項】を参照。

【評価方法】

基本的には期末試験の結果で評価します。試験問題は、①くずし字の読解、②和様漢文の読み下しです。ほかにも、くずし字や和様漢文を読めるようになりたいという意欲の有無、講読史料の担当箇所に取り組む姿勢を重視します。場合によっては加減点することがあります。

【テキスト】

皆さんと講読する「琉球藩在勤来翰」は1回目の講義で配布します。また、必要に応じてレジュメを配布します。

【参考文献】

林英夫・若尾俊平編『増訂 近世古文書解読辞典』（柏書房、1972年）、ほかにも、くずし字を調べるための字典などについては1回目の講義で紹介します。

社会学理論 I

担当教員 鳥山 淳

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

この講義では、「社会的存在としてのわたし（たち）」を見すえることを中心的な課題としながら、社会学の基本的な認識方法を学んでいきたい。社会学の出発点とは、「わたし（たち）」の中に充満している社会を発見し、それを問い直していく作業である。そのために必要とされる基礎的な視点を獲得できるように、「わたし（たち）」を意識しながら講義を進めていきたい。

【授業の展開計画】

- 第1回 イントロダクション～「見えにくい社会」を見る
- 第2回 「価値自由」～社会学の態度
- 第3回 社会を発見する基本的な視座
- 第4回 「現実的」とはどういうことか
- 第5回 挿話Ⅰ 「現実主義」の落とし穴
- 第6回 身体と社会
- 第7回 感情と社会
- 第8回 集団とネットワーク
- 第9回 アイデンティティから社会を見る
- 第10回 アイデンティティの危機と政治
- 第11回 ライフコースとライフヒストリー
- 第12回 挿話Ⅱ 戦争体験と聞き書き
- 第13回 文化とイデオロギー
- 第14回 家族とイデオロギー
- 第15回 労働とイデオロギー
- 第16回 学期末テスト

【履修上の注意事項】

特になし。

【評価方法】

学期末テスト50%、小レポート25%、参加姿勢25%

【テキスト】

特定のテキストは使用せず、必要な資料は講義の中で配布する。

【参考文献】

井上俊・船津衛『自己と他者の社会学』（有斐閣、2005年）
西澤晃彦・渋谷望『社会学をつかむ』（有斐閣、2008年）

社会学理論Ⅱ

担当教員 鳥山 淳

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

この講義では、社会学の切り口をふまえながら現代社会の構造をつかみ、そこから生じている社会問題を理論的に捉える作業を進めていく。そのために、「国家」「労働」「社会保障」の3つの大テーマを設定し、現代社会が自明の前提としてきた制度や価値観を問い直す視点を身につけたい。

【授業の展開計画】

- 第1回 イン트로ダクション～現代社会をどう捉えるか
- 第2回 社会学で読み解く国家① 想像の共同体
- 第3回 社会学で読み解く国家② ナショナリズムと戦争
- 第4回 社会学で読み解く国家③ 南北問題と世界システム論
- 第5回 社会学で読み解く国家④ 移動する人々と国籍の壁
- 第6回 挿話Ⅰ 貧者の徴兵制
- 第7回 社会学で読み解く労働① 学校と工場による規律訓練
- 第8回 社会学で読み解く労働② 資本主義と階級
- 第9回 社会学で読み解く労働③ 家事労働とジェンダー
- 第10回 社会学で読み解く労働④ グローバル化の中の労働
- 第11回 挿話Ⅱ 100円ショップから見る現代社会
- 第12回 社会学で読み解く社会保障① 福祉国家モデル
- 第13回 社会学で読み解く社会保障② 新自由主義とワーク・フェア
- 第14回 社会学で読み解く社会保障③ 現代の貧困問題
- 第15回 社会学で読み解く社会保障④ ベーシック・インカムの思想
- 第16回 学期末テスト

【履修上の注意事項】

特になし。

【評価方法】

学期末テスト50%、小レポート25%、参加姿勢25%

【テキスト】

特定のテキストは使用せず、必要な資料は講義の中で配布する。

【参考文献】

西澤晃彦・渋谷望『社会学をつかむ』（有斐閣、2008年）/湯浅誠『反貧困－「すべり台社会」からの脱出』（岩波書店、2008年）/山森亮『ベーシック・インカム入門』（光文社、2009年）

社会心理学 I

担当教員 大嶺 和歌子

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

【授業の展開計画】

【履修上の注意事項】

【評価方法】

【テキスト】

【参考文献】

社会心理学Ⅱ

担当教員 大嶺 和歌子

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

【授業の展開計画】

【履修上の注意事項】

【評価方法】

【テキスト】

【参考文献】

社会調査とコンピュータ I

担当教員 ダグラス トライタット

配当年次 2年

単位区分 選択

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

【授業の展開計画】

【履修上の注意事項】

【評価方法】

【テキスト】

【参考文献】

社会調査とコンピュータⅡ

担当教員 ダグラス トライタット

配当年次 2年

単位区分 選択

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

【授業の展開計画】

【履修上の注意事項】

【評価方法】

【テキスト】

【参考文献】

社会調査法 I

担当教員 澤田 佳世

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考 社会コース

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

本講義は、これから社会調査を学んでいこうと考えている、あるいは研究過程上社会調査を必要としている学生を対象とした、社会調査の初歩・基礎をレクチャーするものである。社会調査の目的や意義、調査の事例や量的・質的両調査の紹介はもちろんのこと、近年「調査被害」と称され揶揄される問題と関連して、調査員としての「心がまえ」（倫理）に関しても重点をおいた学習課題とする。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	イントロダクション（講義目的・内容紹介、他の社会調査士科目との関連性・位置づけ）
2	「社会調査」という世界への招待①（社会調査の意味、現代社会における意義、目的）
3	「社会調査」という世界への招待②（社会調査の歴史）
4	「社会調査」という世界への招待③（社会調査の種類と用途）
5	社会調査の注意書き（社会調査はなぜ煙たがられるか—「調査被害」と調査倫理—）
6	社会調査の基本ルール①（記述と説明、概念と概念の操作的定義）
7	社会調査の基本ルール②（変数と仮説）
8	情報資源の活用法①（学術情報ネットワークの活用法、NACSIS、WEBCATなど）
9	情報資源の活用法②（官庁統計、世論調査など二次的データの活用法と基本ルール）
10	量的調査の実際①（統計的調査法とは何か—量的調査の特性と種類、その魅力／問題点—）
11	量的調査の実際②（統計的調査法とは何か—悉皆調査と標本調査、「サンプル」という考え方—）
12	質的調査の実際①（事例研究法とは何か—質的調査の特性と種類、その魅力／問題点—）
13	質的調査の実際②（事例研究法とは何か—聞き取り調査の仕方と実践—）
14	質的調査の実際③（事例研究法とは何か—参与観察法、ドキュメント分析、生活史法—）
15	まとめ（ふりかえりと各学習課題の点検・提出）
16	

【履修上の注意事項】

毎回の授業は、講義および学生による実践的な作業でとりおこなう。

【評価方法】

出席（リアクションペーパーの提出）、演習課題、学期末レポート

【テキスト】

大谷信介他編著、『社会調査へのアプローチ—論理と方法—』（第2版）、ミネルヴァ書房、2005年

【参考文献】

毎回の授業で、適宜参考文献を提示する。

社会調査法 I

担当教員 宮平 隆央

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考 文化コース

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

社会調査はいつたい何のために行うのか？社会調査にはどのような種類があるのか？
この講義では、社会調査の歴史や具体的事例の勉強を通じ、その意義や種類とその内容（質的調査と量的調査の特徴・方法など）、調査をする上での倫理・心構えなど、社会調査に関する基礎的事項を学ぶ。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	イントロダクション（本講座の目的・内容・スケジュールの紹介）
2	社会調査とは何か？（社会調査の意義・用途）
3	社会調査の種類とその方法（質的調査と量的調査、その特徴と方法の概要）
4	社会調査の歴史（古代の戸籍調査から現代のネット調査まで）
5	社会調査における倫理と課題1（調査実施上の注意点、調査と社会の関係）
6	情報収集の方法1（官公庁、図書館、書店等の活用）
7	情報収集の方法2（NACSIS、WEBCATなどインターネットの活用）
8	先行事例の検討とテーマ設定の方法（収集した先行事例の読み方と操作概念・仮説構成の概略）
9	事例に学ぶ量的調査1（量的調査の種類とその概要、作業の流れ）
10	事例に学ぶ量的調査2（標本調査の特徴と方法）
11	事例に学ぶ質的調査1（質的調査とインタビュー調査の特徴と方法）
12	事例に学ぶ質的調査2（観察法による調査の特徴と方法）
13	事例に学ぶ質的調査3（ドキュメント分析による調査の特徴と方法）
14	前期講義のふりかえり（調査の種類・方法、調査倫理・課題を中心に）
15	テスト、レポート提出
16	

【履修上の注意事項】

- ・希望者が定員を上回った場合、原則として社会文化学科・文化コースの学生を優先する。
- ・授業中の私語、携帯は厳禁。場合によっては退席を命じる場合もある。その際は欠席したものとして取り扱う。
- ・病気等やむをえない理由による欠席の場合は次の講義で申し出ること。何らかの救済措置を設ける。

【評価方法】

原則として、下記の基準で行う。

- ・テスト 30点
- ・レポート 40点
- ・出席状況 30点（15回×2点）

その他、授業態度等を勘案し、総合的に評価する。

【テキスト】

大谷信介他編著『社会調査へのアプローチ—論理と方法—』（第2版）ミネルヴァ書房、2005年

【参考文献】

- ・谷岡一郎著「「社会調査」のウソ リサーチリテラシーのすすめ」文藝春秋（文春新書）、2000年
- ・好井裕明「あたりまえを疑う社会学」光文社新書、2005年 ほか、講義で適宜指示する。

社会調査法Ⅱ

担当教員 澤田 佳世

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考 社会コース

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

社会調査法Ⅰにおける基礎を踏襲したうえで、社会調査（主に量的調査）によって収集した資料やデータを整理し、分析するための具体的な方法を解説する。とくに、近年の学生たちが困難をきわめている「調査研究テーマの立て方」そのものからスタートし、調査の企画・設計、概念や変数の意味に関する学習から仮説構成など、社会科学の初歩的研究作業もレクチャーしていく。実際に調査票を作成し、標本数と誤差、サンプリング（標本抽出）の論理と実践を学んだうえで、グループでミニ調査を実施し、データの整理や分析を報告してもらう。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	イントロダクション（講義の内容、学習目標の紹介、他の社会調査士科目との関連性・位置づけ）
2	調査の企画・設計①（調査テーマの設定、仮説構成、概念の操作的定義）
3	調査の企画・設計②（グループ学習—調査企画書を作成しよう—）
4	調査票作成の実際①（調査票の構造、質問文・選択肢作成と注意事項）
5	調査票作成の実際②（グループ学習—調査票を作成しよう—）
6	サンプリングの論理と種類（無作為抽出の考え方と方法）
7	サンプル数の算出法と標本誤差（論理と実践）
8	サンプリングの実践①（乱数の発生と単純無作為抽出法）
9	サンプリングの実践②（系統抽出法と層化抽出法）
10	調査の実施方法（調査票の配布および回収法、面接調査の仕方、フィールドノートの意義と活用法）
11	調査データの整理①（エディティング、コーディング、データインプット、データクリーニング）
12	調査データの整理②（単純集計とクロス表の作成）
13	グループ学習（ミニアンケートの実施と簡単なデータの集計）
14	グループによるアンケート調査の成果報告
15	まとめ（ふりかえりと各学習課題の点検・提出）
16	

【履修上の注意事項】

毎回の授業は、講義および実践的な作業やグループ学習でとりおこなう。

【評価方法】

出席（リアクションペーパーの提出）、グループ報告、演習課題、学期末レポート

【テキスト】

大谷信介他編著、『社会調査へのアプローチ—論理と方法—』（第2版）、ミネルヴァ書房、2005年

【参考文献】

毎回の授業で、適宜参考文献を提示する。

社会調査法Ⅱ

担当教員 宮平 隆央

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考 文化コース

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

この講義では、社会調査法Ⅰにおいて得られた基礎的知識を基に、テーマ設定、資料・データ収集、調査企画、調査票作成、サンプリング、実査管理、データ処理、分析などの手法を学び、実際に自分で調査の設計と実施ができる技術の習得を目的として講義を行う。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	イントロダクション（講座の目的・内容・スケジュール）
2	調査テーマの検討に向けた情報収集とその活用
3	概念・変数・仮説の考え方とその活用
4	グループ作業（資料収集とテーマの検討）
5	調査設計・企画の方法（調査方法の選び方、スケジュールの組み立て方など）
6	調査票の作成1（調査票設計の基本的な考え方）
7	調査票の作成2（ワーディング、質問の配列など、質問文作成にあたって注意すべき点）
8	サンプリングの方法1（サンプリングの考え方と基本的な理論）
9	サンプリングの方法2（サンプリングの種類と実際の作業の流れ）
10	調査の実施方法1（調査管理者としての作業の流れ）
11	調査の実施方法2（調査員としての作業の流れ）
12	調査データの整理（エディティング、コーディング、クリーニング、データの検定）
13	集計結果の検証（統計的手法によるデータの検証）
14	グループ発表とまとめ1
15	グループ発表とまとめ2
16	

【履修上の注意事項】

- ・希望者が定員を上回った場合、原則として社会文化学科・文化コースの学生を優先する。
- ・授業中の私語、携帯は厳禁。場合によっては退席を命じる場合もある。その際は欠席したものとして取り扱う。
- ・病気等やむをえない理由による欠席の場合は次の講義で申し出ること。何らかの救済措置を設ける。

【評価方法】

- ・出席
 - ・グループ発表
 - ・発表報告書
- などを元に総合的に評価する。

【テキスト】

- ・大谷 信介ほか著「社会調査へのアプローチ—論理と方法」ミネルヴァ書房、2005年

【参考文献】

- ・谷岡一郎著「「社会調査」のウソ—リサーチリテラシーのすすめ」文藝春秋（文春新書）、2000年
- ・好井裕明「あたりまえを疑う社会学」光文社新書、2005年

社会病理学

担当教員 一座間味 宗治

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

【授業の展開計画】

【履修上の注意事項】

【評価方法】

【テキスト】

【参考文献】

集落地理論 I

担当教員 濱里 正史

配当年次 2年

単位区分 選択

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

20世紀は都市化の世紀と言われるほど都市化が進行しており21世紀もこの傾向は続くと予測されている。したがって、都市について学ぶことは現代および未来の社会を学ぶことに通ずる。特に最近では環境問題が人類の現在と未来における最重要課題として浮上するなか、これに対処する実践の場としての集落・都市の在り方が問われている。本講義では、集落地理論のみならず人文・社会科学全般において重要な研究対象の1つである都市について地理学的視点を重視しながら特に「沖縄の都市と集落」及び「環境と都市」について学ぶことを目的とする

【授業の展開計画】

講義のテーマは大きく2つに分かれる。1つは「沖縄の都市と集落」である。具体的には、「沖縄コナベーション」、「沖縄における基地と都市形成」、「沖縄の都市開発と環境問題」などについて学んでいく。もう1つのテーマは「環境と都市」である。具体的には、「エネルギーと都市」、「自動車と都市」についてヨーロッパの事例を参考にしながら講義した後、環境先進国ドイツの「環境都市フライブルク」を事例に、環境対策の実践の場としての都市とそのまちづくりがどのようなものであるかを学んでいく。

週	授 業 の 内 容
1	イントロダクション
2	沖縄コナベーション1
3	沖縄コナベーション2
4	沖縄における基地と都市形成1
5	沖縄における基地と都市形成2
6	沖縄における基地と都市形成3
7	沖縄の都市開発と環境問題1
8	沖縄の都市開発と環境問題2
9	エネルギーと都市1
10	エネルギーと都市2
11	自動車と都市1
12	自動車と都市2
13	環境都市フライブルク1
14	環境都市フライブルク2
15	期末試験
16	

【履修上の注意事項】

出席は取らないが、講義に出席しない限り試験は書けないことに注意すること

【評価方法】

試験およびレポートを総合的に評価する。

【テキスト】

授業は毎回配る配付資料を基に行う。

【参考文献】

テキストは特にないが参考文献については随時指示する。

集落地理論Ⅱ

担当教員 崎浜 靖

配当年次 2年

単位区分 選択

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

集落地理論Ⅱでは、集落の中でも「村落」に関する歴史地理に関する講義を行う予定である。とくに村落景観に関する講義内容については、絵図資料や地図資料の読解、GIS（地理情報システム）を用いた分析方法、さらにはフィールドワークの方法に重点をおく。村落の社会経済的構造に関する講義について、これまでの沖縄研究の事例を映像資料を用いて紹介し、地域史・民俗学の研究成果を盛り込んで講義を進める予定である。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	村落地理学の研究史
2	村落と地図①－地形図－
3	村落と地図②－国土基本図と地籍図－
4	村落と地図③－古地図と絵図資料－
5	村落と地図④－空中写真の判読とその利用方法－
6	村落と地図⑤－地理情報システムの利用方法－
7	村落の景観①－地理学の景観概念－
8	村落の景観②－景観研究の方法－
9	村落の景観③－景観研究の事例－
10	村落の景観④－景観調査の方法と実践－
11	村落の社会構造①－形態から生態へのアプローチ－
12	村落の社会構造②－沖縄村落の歴史地理－
13	村落の社会構造③－村落社会調査の方法と実践－
14	野外学習－本部町の村落空間－
15	期末試験
16	

【履修上の注意事項】

地図帳を持参して講義に参加すること。課題提出と出席点、野外学習の参加を重視するので注意すること。

【評価方法】

期末試験と課題点、出席点により総合的に判断する。

【テキスト】

毎回、プリントを配布する。

【参考文献】

仲松弥秀著『神と村』 梟社
田里友哲著『論集 沖縄の集落研究』 離宇宙社

生涯学習概論

担当教員 稲福 政斉

配当年次 2年

単位区分 選択

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

博物館は、市民が生涯学習を進める上で学習機会や情報を得るため重要な役割を有する施設である。そのため博物館の専門職員である学芸員は、調査研究に裏付けられた高度な専門性のもとより、学習者を援助・指導するための基礎的な知識や技術を備えることが要求されている。

本講義は、今日の学芸員に不可欠な生涯学習について基本的な考え方や基礎知識を学習するとともに、学芸員としての資質を養うことをねらいとするものである。

【授業の展開計画】

この授業は講義および実習により構成する。講義では、博物館学芸員に求められる生涯学習についての基本的な考え方、基礎的知識を中心に、おおむね次に掲げる内容を取り扱う。

1. 生涯学習とは
2. 生涯学習の領域
3. 生涯学習の形態と方法
4. 生涯教育と生涯学習
5. 生涯各期における学習の課題
6. 社会教育行政と生涯学習
7. 生涯学習支援のための施設
8. 博物館行政
9. 博物館における学芸員
10. 学芸員と生涯学習
11. 博物館ボランティアと生涯学習
12. NPOと生涯学習
13. 生涯学習と博物館のこれから

また実習では、実際に資料を調査して調書に記録し、これをもとに展示解説文を作成するという一連の作業を通じ、調査研究、展示、教育普及といった学芸業務と生涯学習の関連性について学習する。

なお、博物館現場の今日的な実情等についても、随時授業の内容に反映させていく予定である。

【履修上の注意事項】

本講義では生涯学習の概要や博物館と生涯学習に関する基本的事項を学ぶことはもとより、情報を的確に処理してそれをもとに自ら考え、理解を深めるという、学芸員に求められる資質を養うこともあわせて目的としている。そのため、板書やレジュメでは講義内容の詳述を行わないので、講義内容を各自でまとめ、その内容を十分に理解しておくこと。

また、課題などの提出期限は厳守するものとし、締切日以降の提出は一切受け付けないので充分留意すること。

【評価方法】

本学の学部履修規程第16条に基づき、100点を満点とし、80点以上を優、70点以上80点未満を良、60点以上70点未満を可、60点未満を不可として評価を行う。

なお、採点基準は 講義への出席（20点）・小考査（20点）・実習に係る提出物（30点）・レポート等（30点）とし、詳細は初回講義の冒頭で説明する。

【テキスト】

テキストは特に指定しない。

毎回配布するレジュメおよび資料により、講義・実習を進める。

【参考文献】

倉内史郎・鈴木眞理 編著 『生涯学習の基礎』1998年 学文社

全国大学博物館講座協議会西日本部会 編 『概説 博物館学』2002年 芙蓉書房出版

ジェンダーの思想

担当教員 武田 一博

配当年次 2年

単位区分 選必

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

関連資格

備考

【授業のねらい】

ジェンダーとは、社会的・文化的につくり出される「男らしさ」「女らしさ」の性差のことを言います。講義では、たとえば結婚した男性がなぜ「主人」や「旦那」と呼ばれるのに対し、女性は「家内」や「妻」（妻とは家の端のことを意味します）、挙句の果ては「愚妻」と呼ばれるのはなぜか、などを考えて行きます。そして、その歴史的・社会的背景を考えると同時に、現代社会の基本的理念である男女平等（現代風に言うと、ジェンダー・イクオリティー）をどうすれば身近なものに実現できるか、をいっしょに考えてみたいと思います。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	講師自己紹介、授業の概要説明
2	成績評価について、ジェンダーとは何か
3	「主人」「旦那」「亭主」について
4	「家内」「妻」「愚妻」について
5	男尊女卑の歴史的背景：女性天皇と家父長制
6	現代における男尊女卑
7	女性の生涯賃金は、男性の半分
8	「女には学問はいらぬ」、永久就職
9	「男のくせに」と「女のくせに」
10	「男だから」許されることと、「女だから」許されないこと
11	男女雇用機会均等法と女性差別
12	男女共同参画社会とジェンダー・イクオリティー
13	「父兄」＝女性差別用語をなくそう
14	新しい「男らしさ」「女らしさ」について
15	受講生の感想・評価、レポート提出
16	

【履修上の注意事項】

【評価方法】

学期末に提出するレポートで成績を評価します。途中で課題を出すこともあります。課題は、内容に応じて、成績に加味します。出席点は、考慮しません。あくまで、内容次第です。

【テキスト】

【参考文献】

実習

担当教員 稲福 みき子

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 集中

授業形態 実験実習

単位数 2.0

【授業のねらい】

実習調査は、民俗学のデータ収集の場であるとともに、理論検証の場と位置づけられる。村落祭祀の観察調査を軸に、グループごとのテーマを持って調査を行う。その過程を通じて調査の方法を培い、民俗文化への理解を深める。基礎演習で、実習についての事前学習と調査後の資料整理、報告書作成を行う。

【授業の展開計画】

- ①夏期休暇中、1週間ほどの日程で現地調査を行う。
- ②調査地は予備調査を経て決定する。
- ③調査は、村落祭祀の観察、聞き取りを中心に、社会組織、祭祀組織、人生儀礼など各グループのテーマごとにテーマを設定して行う。
- ④実習中は、毎日1～2時間の報告・討論の場をもつ。

【履修上の注意事項】

調査は、現地の方々の協力が得られなければ成立しない。積極的な取り組みと同時に節度ある行動を心がけること。

【評価方法】

フィールドワークに対してどれだけ積極的に取り組んだのかということで評価する。

【テキスト】

ゼミ報告書『民族研究』1号から35号。
他に適宜紹介する。

【参考文献】

実習

担当教員 宮城 邦治

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 集中

授業形態 実験実習

単位数 2.0

【授業のねらい】

島嶼的特性の沖縄の地域（島でありシマでもある）の歴史、社会、文化への理解を深めることを目的とする。調査地と調査テーマを決め、社会環境と自然環境の視点から巡検調査をおこなう。

【授業の展開計画】

前期) 「基礎演習」で複数の調査地とテーマを決め後に、複補地の巡検を実施する。候補地では地域の自然環境などの特性を把握しつつ、先々の調査テーマになりそう要素（集落景観、湧水、生業など）の洗い出しを行う。前期には3～4ヶ所の地域を巡検する。

後期) 前期同様に3～4ヶ所の異なる調査候補地の巡検を実施し、調査テーマの精査を行う。

【履修上の注意事項】

実習日程は登録学生との調整でおこなうことから、決定した日程には必ず参加すること。様々な事由で参加できない場合は速やかに連絡すること。

【評価方法】

実習への参加回数、レポートの提出回数などを勘案して評価する。

【テキスト】

調査地、テーマなどが決まり次第、すみやかにテキスト、資料などを告示または配布する。

【参考文献】

調査地、テーマなどが決まり次第、関連する文献などを告示または配布する。

実習

担当教員 上原 静

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 集中

授業形態 実験実習

単位数 2.0

【授業のねらい】

古代遺跡を実際に発掘する。そのことにより、調査の方法(遺跡周辺の古環境及び変化の実態を聞き取り、地形測量、層位の識別、遺物の検出、実測整理、統計整理、図版の作成等)を学ぶ。遺跡の発掘調査は一種の遺跡破壊行為である。一度発掘してしまうと、遺跡は再び戻らない。このことを十分に認識して、調査には周到な計画と細心の注意が必要であることを理解してもらう。そうすることによって、報告書の意義を認識してもらう。

【授業の展開計画】

1、沖縄の先史文化について紹介する。 2、考古学の考え方を把握してもらう。 3、土器、石器、骨器、陶磁器、その他の人工遺物を調べ、発表する。 4、測量、写真技術を習得し、遺跡の地形図作成や写真撮影などの訓練をおこなう。 5、出土遺物の洗浄、注記、接合、集計をおこなう。 6、出土遺物の実測図を作成し、報告書にまとめる。1年間のスケジュールは前期に1～3を調査前の基本的な知識として学び、夏休み休暇に発掘実習を実施する。その際に4を中心とした点を習得する。後期から5～6までの内容に取り組み、その成果としての発掘調査報告書を2月末までに刊行する。

【履修上の注意事項】

夏期の発掘実習に必ず参加すること。

実習は技術の習得に力点をおくので、講義時間以外にも遺物の整理に従事すること。

【評価方法】

レポート、テストを数回、随時に課す。

遅刻・欠席は減点の対象とする。

【テキスト】

【参考文献】

文化財保護委員会『埋蔵文化財発掘調査の手引き』国土地理協会 1967

実習

担当教員 田名 真之

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 集中

授業形態 実験実習

単位数 2.0

【授業のねらい】

基礎演習（南島歴史学）での事前学習を踏まえて取り組む歴史史料調査の実習。夏休み期間中に1週間程度、「沖縄県公文書館」で、琉政文書（琉球政府の行政文書）を中心とした公文書やその他史料をもとに、史料の検索の方法、収集、分析などについて学習する。その後の報告書作成に向けては関係者への聞き取りなども視野に入れる。

【授業の展開計画】

1. 事前学習段階で、班（3～4人）を編成
2. 班ごとに調査テーマを決め、キーワードを設定
3. 夏季休暇中、「公文書館」での調査
4. 補足調査、関係者、機関への聞き取りも想定
5. 調査結果の整理、分析および報告
6. 調査報告書の作成

【履修上の注意事項】

1. 実習調査は必修で、参加が義務づけられていることを心得ておくこと。
2. 班単位での共同作業であり、全員の協力体制が不可欠、その点常に心がけること。

【評価方法】

実習に取り組む姿勢と報告などを総合的に評価する

【テキスト】

適宜紹介する

【参考文献】

適宜紹介する

実習

担当教員 澤田 佳世

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 集中

授業形態 実験実習

単位数 2.0

【授業のねらい】

本実習の主要テーマは「沖縄の社会問題とその現代的課題」である。
本実習では、少子高齢化とグローバル化が進行する中で、複雑化し多様化する沖縄の社会問題とその現代的課題について、社会的マイノリティの視点から複眼的・多角的に理解することを目的に、グループでインタビュー法を中心とする現地調査を行う。基礎演習で実習前のテーマ設定と調査対象者の選定、ならびに事前学習を行い、実習後に調査結果の整理と報告書の作成を行う。

【授業の展開計画】

- ①調査の実施時期： 夏期休暇中に集中的に現地調査を行う。
- ②調査の概要： 沖縄社会において複雑化し多様化する社会問題とその現代的課題を多面的に理解するために、学生が設定したテーマ（性・生殖、家族、介護・育児、労働、医療・福祉、文化、ジェンダー、エスニシティ、その他の社会問題）に基づいて、グループ単位で、インタビュー法を中心とする現地調査を実施する。
- ③調査対象： 沖縄県内における官庁、企業、学校、病院、福祉施設、地域住民、NGO・NPO団体、自助グループや当事者団体を調査対象とする。
- ④主な調査項目： (1)統計資料による客観的把握、(2)行政による政策・制度の実態、(3)民間の多様なアクターによる支援・取組の実態（問題背景、目的、活動内容、今後の課題など）、(4)その他、設定したテーマと調査対象者に応じた質問項目
- ⑤データ収集の方法： 選定した調査対象者・機関に対するインタビュー調査（インタビューガイドを参照した半構造的インタビュー法）を中心とする。ただし、設定した社会問題を複眼的かつ多面的に理解するために、各種統計資料や文書資料、写真や映像資料など多種多様かつ「良質」な量的・質的データも収集する。
- ⑥その他
 - (1)調査地と調査項目は学生の関心を優先して決定する。
 - (2)実習期間中に必要に応じて、報告・討論の場をもうける。

【履修上の注意事項】

- ①学生は、調査地域および対象者に不快感を与えないよう、調査倫理に則った節度のある行動を要する。協力してくれる調査対象者に感謝し、対象者の意志を尊重した誠実な対応を心がけること。
- ②調査実習に主体的かつ意欲的に取り組むとともに、グループによる調査を通じて協同性を培うこと。
- ③各自、録音機器やデジタルカメラ、ノート（フィールドノート用）など調査に必要な道具・機材を用意することが望ましい。ただし、ICレコーダーは各グループに1台貸し出す。

【評価方法】

実習に取り組む姿勢と報告・討論の内容を総合的に評価する。

【テキスト】

適宜紹介する。

【参考文献】

適宜紹介する。

実習

担当教員 石垣 直

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 集中

授業形態 実験実習

単位数 2.0

【授業のねらい】

本実習の目的は、さまざまな社会科学研究において重視されるようになってきた現地調査（フィールドワーク）の実施を通じて、現地社会・文化に対する理解を深めることにある。本実習は基礎演習と連動しており、後期の基礎演習では、調査成果の整理・分析を通じて、最終的には調査報告書の作成を目指す。

【授業の展開計画】

- ①夏期休暇中における現地調査の実施（1週間程度）
- ②現地調査手法としての聞き取り調査、アンケート調査
- ③現地調査の進捗状況に応じた中間報告・討議

【履修上の注意事項】

現地調査を行う上では、（調査対象社会およびそこで活動する人びとから）「学ばせていただく」という姿勢が重要である。調査対象者・協力者に対する誠実な態度が求められることを明確に意識した上で、現地調査への主体的な参加・参与を望む。

【評価方法】

現地調査に対する態度、ならびに調査中・調査後の成果報告や質疑応答への参与態度に基づいて総合的に評価する。

【テキスト】

適宜紹介。

【参考文献】

適宜紹介。

実習

担当教員 鳥山 淳

配当年次 2年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 集中

授業形態 実験実習

単位数 2.0

【授業のねらい】

基礎演習の取り組みをふまえて、夏期実習（フィールドワーク）を行う。平和研究の視点から、「地域の歩みと現在」を調査し、記録する方法を修得していく。事前の準備や調査の依頼、調査の実践、記録の作成が主な作業となる。テーマおよび調査地については、基礎演習の授業の中で決定する。

【授業の展開計画】

夏期休暇中に集中して調査を行い、必要に応じて報告や議論を交えながら進める。

【履修上の注意事項】

グループ作業であることを常に念頭におきながら、互いに議論し積極的に実践するよう心がけてほしい。そして調査に応じてくれる方々の心情を想像し、責任感と誠意をもって対応することの大切さを学んでほしい。

【評価方法】

取り組みの姿勢を最重視して評価する。

【テキスト】

指定しない。

【参考文献】

必要に応じて紹介する。

中国の言語と文化 I

担当教員 クレグ K ジェイコブソン

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

【授業の展開計画】

【履修上の注意事項】

【評価方法】

【テキスト】

【参考文献】

島嶼環境論 I

担当教員 渡久地 健

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

「島嶼」。「島」と「嶼」は同義であるが、あえて区別するならば、「嶼」は「島」より小さいものを指す。ともあれ、島嶼は、海に囲まれた小さな陸地、あるいは海によって大陸や本土から隔絶された小空間である。海に囲繞されるゆえ、島嶼は範囲が明確な生態系をなしている。本講義は、「小さい」「隔絶している」「海に囲まれている」という島嶼の本源的な性格が、その自然（島嶼生態系）にどのような影響を与えているか、を考えることを目的とする。対象地域は、琉球列島を含めて、熱帯～亜熱帯の島々である。

【授業の展開計画】

1. イントロ：島はどういう環境か？ 島嶼研究の意義
2. 島の世界：島・シマ・縞・island
3. 島の形成、島の分類 島嶼環境の構成要素
4. 島の生物相の成り立ち（1）：面積効果
5. 島の生物相の成り立ち（2）：年数効果、距離効果
6. 隔絶された自然（1）：生物が来た道
7. 隔絶された自然（2）：固有種の形成
8. 海と島嶼（1）：環礁の形成、環礁島の植生
9. 海の島嶼（2）：海洋島の気候と生物相（ハワイ諸島、ガラパゴス諸島の事例）
10. 海の島嶼（3）：海と陸のはざまの植生（マングローブ）
11. 海と島嶼（4）：海洋の自然とその役割
12. 島の自然環境（1）：屋久島
13. 島の自然環境（2）：奄美諸島
14. 島の自然環境（3）：南太平洋の島々
15. 期末試験

【履修上の注意事項】

抽選となった場合は、4年次を優先する。

【評価方法】

宿題（数回課する）ならびに期末試験を総合して評価する。

【テキスト】

使用しない。毎回2枚（4ページ）程度のプリントを配布する。

【参考文献】

小野幹雄著『孤島の生物たち』（岩波書店1994）、京都大学総合博物館編『日本の動物はいつどこからきたか』（岩波書店、2005）

島嶼環境論Ⅱ

担当教員 渡久地 健

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

島嶼は海に囲まれた小陸地、あるいは海によって大陸または本土から隔絶されて小社会である。海に圍繞される故に、島嶼は海洋資源など海との関わりが大きく、また境界が明瞭な閉じた小世界をなす。他方、島を取り巻く海は四周に開かれて海路でもあり、島嶼は外に開かれ地域間を結ぶ交通の結節点でもある。本授業では「小さな社会」「島を取り巻く海」「交通の結節点」という観点から、島嶼環境と生活・文化との関わりについて考える。対象地域は、琉球列島を含めて熱帯～亜熱帯の島々である。

【授業の展開計画】

- 1 イントロ：島はどのような世界か？
- 2 島嶼世界の特徴、島はどのように扱われてきたか？
- 3 小島の生活（1）：ミクロネシアとポリネシアの孤島
- 4 小島の生活（2）：メラネシアの環礁島の土地利用
- 5 小島の生活（3）：南太平洋島嶼の植物利用
- 6 島を取り巻く海（1）：島嶼生活に対する海の影響
- 7 島を取り巻く海（2）：漁撈活動
- 8 島を取り巻く海（3）：資源の管理
- 9 島を取り巻く海（4）：糸満漁民の展開
- 10 島を取り巻く海（5）：マリントーリズム
- 11 島を取り巻く海（6）：海の災害
- 12 島嶼間交通（1）：航海技術
- 13 島嶼間交通（2）：交易ネットワーク
- 14 島嶼間交通（3）：明治期水路誌の世界
- 15 期末試験

【履修上の注意事項】

抽選となった場合は、4年次を優先する。

【評価方法】

出席状況と期末試験を総合して評価する。

【テキスト】

使用しない。毎回2枚（4ページ）程度のプリントを配布する。

【参考文献】

印東道子編『ミクロネシアを知るための58章』（赤石書店、2005年）

南島社会学 I

担当教員 石川 朋子

配当年次 2年

単位区分 選択

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

【授業の展開計画】

【履修上の注意事項】

【評価方法】

【テキスト】

【参考文献】

南島社会学Ⅱ

担当教員 石川 朋子

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

「南島社会」を論ずるには、さまざまな視点からの分析が可能であるが、本講義では、戦争体験、出稼ぎ・移民、米軍基地、郷友会、共同体、復帰等のキーワードから、「南島社会」を考える。

【授業の展開計画】

I. 死亡広告にみる沖縄社会、II. 郷友会社会、III. 出稼ぎ・移民、IV. 戦争体験、V. 米軍基地、VI 復帰等を通して考えていく。講義では、適宜、受講生個人またはグループ（ワークショップ）で考える時間をもうけ、提出してもらおう場合もある。また、沖縄社会理解のため、戦争体験者の避難経路追体験等を実施する場合もある。

【履修上の注意事項】

【評価方法】

出席、レポート、テスト等の総合評価

【テキスト】

講義は、毎回配布するレジュメと資料に沿って行う。

【参考文献】

講義のなかで適宜紹介します。

南島民俗学 I

担当教員 稲福 みき子

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

沖縄の民俗文化研究において重要な役割を果たした諸先達を取りあげ、その生涯と学問の展開を時代的な背景を考慮しながら追い、その代表的な論文の一つにふれる。そうした作業を通じて、沖縄の民俗文化研究のエッセンスへ接近したい。

【授業の展開計画】

前期

- 1 沖縄民俗研究史概要(1)
- 2 " (2)
- 3 柳田国男と沖縄研究(1)
- 4 " (2)
- 5 折口信夫と沖縄研究
- 6 伊波普猷と沖縄研究(1)
- 7 " (2)
- 8 比嘉春潮の沖縄研究(1)
- 9 " (2)
- 10 金城朝永の沖縄研究(1)
- 11 " (2)
- 12 仲原善忠の沖縄研究(1)
- 13 " (2)
- 14 佐喜真興英の沖縄研究(1)
- 15 " (2)

【履修上の注意事項】

講義に先立って資料を配付するので、予め目を通して講義に望むこと。

【評価方法】

何本かの小レポートと期末レポートによる。

【テキスト】

講義は、毎回配布するレジュメと資料に沿って行う。

【参考文献】

参考文献は随時、紹介する。

南島民俗学Ⅱ

担当教員 稲福 みき子

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

沖縄の民俗文化研究において重要な役割を果たした諸先達を取りあげ、その生涯と学問の展開を時代的な背景を考慮しながら追い、その代表的な論文の一つにふれる。そうした作業を通じて、沖縄の民俗文化研究のエッセンスへ接近したい。

【授業の展開計画】

後期

- 1 柳 宗悦と沖縄研究
- 2 外国人による沖縄研究(1)
- 3 " (2)
- 4 W. リブラと沖縄研究(1)
- 5 " (2)
- 6 馬淵東一と沖縄研究(1)
- 7 " (2)
- 8 比較民俗学の展開(1)
- 9 " (2)
- 10 竹田 旦の比較民俗
- 11 桜井徳太郎の比較民俗
- 12 ヨーゼフ・クライナーの沖縄研究
- 13 仲松弥秀の沖縄研究
- 14 社会組織研究の展開
- 15 民俗宗教研究の展開

【履修上の注意事項】

講義に先立って資料を配付するので、予め目を通して講義に望むこと。

【評価方法】

何本かの小レポートと期末レポートによる。

【テキスト】

講義は、毎回配布するレジュメと資料に沿って行う。

【参考文献】

参考文献は随時、紹介する。

日本史概論 I

担当教員 深澤 秋人

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

この講義では、7世紀から16世紀にいたる期間の日本社会の歴史を考えます。日本史の時代区分では飛鳥時代から安土桃山時代に相当します。ところで、歴史とは過去のできごとそのものであり、「日本史」として決定したものがどこかに存在するわけではありません。私たちは、日常接する歴史叙述を日本史と思いがちですが、それは歴史そのものではありません。この講義のねらいは、これまで身につけた日本史像を見つめ直し、組み立て直すところにあります。日本史に向き合う自分の視点を身に付けることが到達目標です。

【授業の展開計画】

日本史の大まかな流れを連続的に把握するため、時代区分や歴史上の人物ではなく、土地・租税制度を軸にして日本社会の歴史を考えます。また、いわゆる本土（大和）の歴史に限定せずに、琉球史や北方史および海域アジア史を意識して日本史を考えます。

- 1) 国号や天皇号の成立、朝廷と武家政権の関係、日本の都などについて解説します。
- 2) 律令制国家を考える前提として、五畿七道・国郡制・令制国について解説します。
- 3) 7世紀後半から9世紀末にいたる日本の国のかたち（律令制国家）を考えます。
- 4) 7世紀末から8世紀末までの都城の変遷、平安京から京都への変容過程を考えます。
- 5) 律令制国家の南と北に広がる南島や北方世界との関係、その社会について考えます。
- 6) 土地制度の変化（班田制→負名制）から10・11世紀の日本社会を考えます。
- 7) 武士のルーツとともに、荘園公領制における武士と武家の関係を考えます。
- 8) 平氏政権の性格とともに、鎌倉幕府を運営した東国政権の成立時期を考えます。
- 9) 鎌倉時代の仏教を三つのグループに分類し、いわゆる鎌倉新仏教を再検討します。
- 10) 足利政権の特徴とともに、守護大名による領国支配の歴史的意味を考えます。
- 11) 戦国大名の領国の性格とともに、豊臣政権による兵農分離の歴史的意味を考えます。
- 12) 15世紀における日中貿易の変化、日明貿易以外の中国商品ルートについて考えます。
- 13) 後期倭寇と戦国大名の関係を通して戦国時代を海域アジア世界のなかで再検討します。
- 14) 7世紀から16世紀にいたる日本史の流れを振り返ります。
- 15) 期末試験

【履修上の注意事項】

この講義で問われるのは暗記力ではありません。好奇心と着眼点です。覚えるのではなく、疑問点を見つけ考えようとしてください。しかし、漫然と出席しては自分で疑問点を見つけることはできません。個々が積極的に講義に参加し、一つでも多くの「発見」をすることを意識してください。歴史が「苦手」なあなたも安心して教室に来てください。「日本史」から解き放たれる最後のチャンスかもしれませんよ。お待ちしております。

【評価方法】

期末試験の結果（80%）と講義に参加する姿勢や意欲や態度（20%）によって評価します。試験問題は記述問題（30点配点、15問×2点）と論述問題（50点配点）です。配布したレジュメや自分のノートなど何を見ても構いません。

【テキスト】

ありません。毎回レジュメと絵図などの参考資料を配布します。

【参考文献】

日本史の通史や古代史・中世史のシリーズものは1回目の講義で紹介します。テーマごとの参考文献は毎回配布するレジュメのなかで紹介します。

日本史概論Ⅱ

担当教員 深澤 秋人

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

この講義では、17世紀から19世紀後半にいたる期間の日本社会の歴史を考えます。日本史の時代区分では江戸時代と明治時代に相当します。私たちは19世紀後半以降に編みなおされた「日本史」の歴史叙述に多く接します。「日本史」は現在の日本の国のかたちである国民国家の形成や国民の創出と関連して成立しました。この講義のねらいは、人文科学として日本史を考える意味を考えるところにあります。自明のものとしがちな「日本史」と改めて向き合う必要性に気づくことが到達目標です。

【授業の展開計画】

19世紀後半、現在の日本の国のかたち（国民国家）の原型がどのように形成されたのかを現在に生きる私たちの問題として考えるため、歴史上の人物よりも、琉球やアイヌを歴史の主人公として日本社会の歴史を考えます。また、那覇・長崎・プサン・蝦夷地・樺太・沿海州から「鎖国」状態の日本の国際交流を再検討します。

- 1) 「江戸時代の終わりはいつか」という問いから歴史区分の落とし穴について考えます。
- 2) 17世紀前半から19世紀中頃にいたる日本の国のかたち（幕藩制国家）を考えます。
- 3) 徳川政権のもとで島津氏が琉球を侵攻した目的と結果、二次的な結果を考えます。
- 4) 徳川政権が「鎖国」状態のなかでどのように周辺諸国と関係したのかを考えます。
- 5) 対馬の領主である宗氏の性格が中世と近世でどのように変化するのかを考えます。
- 6) 琉球社会における日本文化の受容形態から18世紀後半の地方文化の状況を考えます。
- 7) 新しい大消費地である江戸の性格とともに、年貢米や特産物の流通について考えます。
- 8) 松前藩の特産物である「蝦夷錦」が日本市場で消費されるまでの流通経路を考えます。
- 9) 徳川政権主導の政治体制である幕藩体制がいつ頃どのように崩壊したかを考えます。
- 10) 1860年代において雄藩、徳川政権、朝廷がどのように再編されたのかを考えます。
- 11) 近代国家の中央政府としての明治政府がどのように成立したのかを考えます。
- 12) 明治政府による北海道と沖縄県の設置から1870年代の外交・領土問題を考えます。
- 13) 1870年代以降における国民の創出と「日本史」の成立との関係を考えます。
- 14) 17世紀から19世紀後半にいたる日本史の流れを振り返ります。
- 15) 期末試験

【履修上の注意事項】

この講義で問われるのは暗記力ではありません。好奇心と着眼点です。覚えるのではなく、疑問点を見つけて考えようとしてください。しかし、漫然と出席しては自分で疑問点を見つけることはできません。個々が積極的に講義に参加し、一つでも多くの「発見」をすることを意識してください。歴史が「苦手」なあなたも安心して教室に来てください。「日本史」から解放される最後のチャンスかもしれませんよ。お待ちしております。

【評価方法】

期末試験の結果（80%）と講義に参加する姿勢や意欲や態度（20%）によって評価します。試験問題は記述問題（30点配点、15問×2点）と論述問題（50点配点）です。配布したレジュメや自分のノートなど何を見ても構いません。

【テキスト】

ありません。毎回レジュメと絵図などの参考資料を配布します。

【参考文献】

日本史の通史や近世史・近代史のシリーズものは1回目の講義で紹介します。テーマごとの参考文献は毎回配布するレジュメのなかで紹介します。

人間環境論 I

担当教員 佐藤 寛之

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

この講義では、環境とは何か？自身の身近な環境を見つめることを通して環境問題を考える。まず前半では生態系や自然の在りようを身近な事例、特に琉球列島についての事例を中心に紹介しつつ、自然や人間、さまざまな立場から見た環境について考える。後半は、人間の暮らしや健康の基礎となる生活環境のなかで生じている環境問題について取り上げ、それぞれの問題に対して何ができるのか、問題点は何かなどを考える。

【授業の展開計画】

- 1 ガイダンス 合意形成とは
- 2 地球上での位置と陸水環境
- 3 世界の気候と琉球列島の気候
- 4 地球の歴史と生命の歴史
- 5 琉球列島の成立の歴史 地形と集落の立地
- 6 琉球列島の成立 2 海洋島と大陸島 砂浜の違い
- 7 琉球列島の自然・生き物と人のかかわり
- 8 生き物の生活史と生態系 生き物が生きていくために必要なもの
- 9 外来種と生息地の劣化
- 10 環境に関する法律や規制
- 11 自然保護ビジネスを考える
- 12 エネルギーを考える
- 13 エコロジーって何？ 循環型社会 合成洗剤
- 14 ゴミとリサイクル
- 15 講義まとめ
- 16 試験

【履修上の注意事項】

授業で配布する資料に基づいて講義する。人間環境論Ⅱは人間環境論Ⅰを受けた各論にあたり、様々な観点からヒトの健康と環境の関わりを考えていくので、引き続き受講することが望ましい。

【評価方法】

統計や資料を正確に読み取り、それに基づいて論理的に自説を展開することを重視する。講義に出席をした、もしくは課題を提出したからといって、単位が認定されるわけではない。テスト80%、日常の授業への参加20%で評価をする。

【テキスト】

なし

【参考文献】

なし

人間環境論Ⅱ

担当教員 佐藤 寛之

配当年次 2年

単位区分 選必

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

関連資格

備考

【授業のねらい】

この講義では、主として人間と自然（環境）とのつきあい方について時間軸にそって食、道具などの身近なテーマについて体験しながら考える。化学物質、電磁波など、新たに人工的に加えられた環境要因とのつきあい方、その開発過程、発想、など近年の環境問題といわれる物の原因について学生同士で考察してもらおう。環境の変化が健康にどのような影響をおよぼしているか、健康を保持しつづけるために環境との関係で私たちにできることは何なのか、様々なトピックスを取りあげていく。

【授業の展開計画】

（ねらいの続き）学生諸君には、日々の新聞をよく読み、話題提供も期待したい。講義だけでなく、学生自身が調べて発表すること、学生同士で討議しながら考え、それを表現する形態の授業も取り入れる。実生活に反映する学習をめざす。ヒトと環境との関わり方を考える。この問題を客観的に考えていく上で、統計や資料が重要である。統計や資料を読み解く力を養ってもらいたい。

- 1 ガイダンス 環境問題とは 評価方法など
- 2 人間の進化（脊椎動物の進化）
- 3 道具の話 石器って何？
- 4 道具の話 2
- 5 科学と戦争 技術の進歩とその推進力
- 7 科学と化学物質の進歩と人間の歴史 環境ホルモンとは何か 化学物質と人体汚染
- 8 公害の歴史 生物濃縮 環境病と社会的背景（水俣病）化学物質過敏症 ダイオキシン
- 9 植物との付き合い方1 食べるための技術
- 10 植物との付き合い方2 食べるための技術
- 11 植生の改変、品種改良から遺伝子組み換えまで、
- 12 技術と効率 食料供給に向けた技術の歴史 遺伝子組み換え食品 食品添加物
- 13 再生食品 イミテーション食品について
- 14 グループ発表準備
- 15-16グループ発表 講義まとめ（予備日）

【履修上の注意事項】

授業で配布する資料に基づいて講義する。人間環境論Ⅱは人間環境論Ⅰを受けた各論にあたり、様々な観点からヒトの健康と環境の関わりを考えていくので、引き続き受講することが望ましい。

【評価方法】

発表（内容と発表方法）および発表を観ることへの参加、レポートおよび平常点と出席により評価する。授業の中で順次グループ発表について準備していくので、なるべく欠席しないこと。発表は必ず行なうこと。レポート50%、発表30%、日常の授業への参加20%で評価する。

【テキスト】

なし

【参考文献】

なし

文化史 I

担当教員 宮里 正子

配当年次 2年

単位区分 選必

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

関連資格

備考 社会コースは選択科目・受講年次は2年

【授業のねらい】

琉球王国から現代までの絵画や彫刻、工芸（漆器、染織、陶器）などの造形を歴史の時系列で捉える。特に、造形の背景にある政治や経済、社会構造などと重ね合わせながら、造形意匠の持つ意味を考えていく。

【授業の展開計画】

講義と画像資料や現物資料を併用する。

I（前期）

- ① 文化の概念
- ② 先史時代から三山統一までの造形
- ③ 三山統一から第一尚氏代の造形
- ④ 琉球の外交政策からみえる造形—明や高麗の陶磁器
- ⑤ 古琉球の造形 1) 史書にみえる造形
- ⑥ 尚真王代の造形 1) 漆芸・石彫建造物
- ⑦ " 2) ノロの造形
- ⑧ 近世琉球の造形 1) 沖縄にのこる工芸
- ⑨ " 2) 日本の交流にみる工芸
- ⑩ " 3) 中国明・清の交流にみる工芸
- ⑪ アジアに繋がる造形—東南アジアの漆工芸
- ⑫ " " 染織工芸
- ⑬ 琉球国王家に伝世した造形
- ⑭ 鎌倉芳太郎と琉球王国の造形
- ⑮ 博物館などで作品鑑賞会
- ⑯ まとめとテスト

【履修上の注意事項】

画像を用いる授業が多いので、遅刻や欠席はしないこと。

【評価方法】

出席及びテストやレポートの成績の合計点

【テキスト】

高良倉吉・田名真之編『図説 琉球王国』河出書房 1993年

【参考文献】

調査報告書・図録など毎時のレジュメで紹介。

文化史Ⅱ

担当教員 宮里 正子

配当年次 2年

単位区分 選必

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

関連資格

備考 社会コースは選択科目・受講年次は2年

【授業のねらい】

琉球王国から現代までの絵画や彫刻、工芸（漆器、染織、陶器）などの造形を歴史の時系列で捉えた前期のⅠを受けて、Ⅱでは技術史の観点からも検証する。

【授業の展開計画】

講義と画像資料や現物資料を併用する。

Ⅱ（後期）

- ① 沖縄の歴史と文化
- ② 近世琉球の文化 1) 向象賢と蔡温の文化施策
- ③ " 2) 江戸上りと芸能にみる造形
- ④ " 3) 絵画
- ⑤ " 4) 彫刻・書
- ⑥ " 5) 染織①
- ⑦ " 6) 染織②
- ⑧ " 7) 染織③
- ⑨ " 8) 漆芸①
- ⑩ " 9) 漆芸②
- ⑪ 近代沖縄の文化 1) 柳宗悦の民芸運動 "
- ⑫ 2) 絵画と写真
- ⑬ 3) 工芸の変貌
- ⑭ 現代沖縄の文化 1) 米軍統治と工芸
- ⑮ 文化財の保存や修復の概念
- ⑯ まとめとテストまたはレポート

【履修上の注意事項】

画像を用いる授業が多いので、遅刻や欠席はしないこと。

【評価方法】

出席及びテストやレポートの成績の合計点

【テキスト】

宮城篤正監修『すぐわかる沖縄の美術』東京美術 2007

【参考文献】

調査報告書・図録など毎時のレジюмеで紹介。

平和運動史

担当教員 西岡 信之

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

民主党政権に代わって連日のようにマスコミ報道されている普天間基地移設問題。今年度の本講座は、普天間基地をはじめ全世界に広がる米軍基地の問題を徹底的に考える講義をめざします。グアムやイラクの米軍基地も検証します。また昨秋、那覇市で取り組まれた無防備地域宣言運動についても、非暴力・非武装の平和な社会をどう作っていくのかを考える視点から考察していきます。武力ではなく平和をつくる方法を平和運動の歴史から私たちは学んでいきたいと思えます。

【授業の展開計画】

～授業のねらいの続き～

受講生みんなで見聞交流し、平和について考えます。講義の最終目標に、米軍基地の国際法違反公聴会を開催します。受講生と一緒に米軍の国際法違反、当該国内法違反、人権・環境無視の実態を調査し発表したいと思えます。なお講義は、DVD、ビデオ等を活用します。

展開計画

- 1 ガイダンスー平和をどのようにして創るのか
- 2 国際法がめざす戦争違法化への道
- 3 米国の戦争犯罪を裁く 国際戦犯民衆法廷
- 5 沖縄国際大学ヘリ墜落事件
- 6 イラクにおける非武装平和運動
- 8 環境問題と基地建設
- 9 米軍基地国際法違反公聴会

【履修上の注意事項】

【評価方法】

- ①毎回出欠をとる。
- ②期末にレポートを提出する（テーマは自由選択）
- ③以上を総合して成績を評価する。

【テキスト】

毎回、講義レジュメと資料プリントを配布する。

【参考文献】

- ①前田朗『市民の平和力を鍛える』（ケイ・アイ・メディア）
- ②無防備地域宣言運動全国ネットワーク『無防備平和条例は可能だ』（耕文社）

平和学 I

担当教員 渡名喜 守太

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

近年日本国内において、南京大虐殺問題・「従軍慰安婦」問題・沖縄戦強制集団死事件をめぐる歴史認識が問題になっている。これらの問題の背景には日本の過去を正当化して日本の名誉回復と軍事国家形成を目論む国家主義者の思惑がある。歴史認識問題を取りあげ、現在の有事体制確立との関連を考えたい。はじめに近代以降、日本が行った戦争を俯瞰し、近代日本の対外膨張（侵略）と植民地・占領地政策（アイヌ・朝鮮・台湾・満州その他の日本の占領地と沖縄の比較）・軍事国家形成などの視点から近代国家日本について考察する。

【授業の展開計画】

【授業のねらい】 続き

さらに沖縄戦について考察する。特に日本軍の加害行為について法的責任考察したい。

【授業の展開計画】

- 1 近代日本の戦争について（第一次世界大戦以前）
- 2 近代日本の戦争について（第一次世界大戦以後）
- 3 国家総動員体制の構築
- 4 植民地政策（アイヌ、朝鮮、台湾、満州と沖縄の比較）
- 5 歴史認識問題（歴史修正主義について）
- 6 歴史認識問題（教科書問題）
- 7 歴史認識問題（南京大虐殺問題）
- 8 歴史認識問題（「従軍慰安婦」問題）
- 9 歴史認識問題（沖縄戦問題）
- 10 歴史認識問題（沖縄戦問題）
- 11 近代の沖縄
- 12 戦後日本の再軍備の歴史
- 13 の再軍備の歴史（有事法制について）
- 14 歴史問題に関する資料講読
- 15 補足講義
- 16 テスト

【履修上の注意事項】

【評価方法】

評価の方法はレポートによる。テストは行わない。

【テキスト】

【参考文献】

平和学Ⅱ

担当教員 渡名喜 守太

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

平和学Ⅱでは、歴史修正主義の根底にある問題としてナショナリズムをとりあげる。最初にナショナリズムの定義について考え、その諸相について見る。さらに日本のナショナリズムについてとりあげ、最終的に琉球併合以降、日本に併合された近代の沖縄とナショナリズムの関連を考えたい。日本の一部になって以降、ナショナリズムが沖縄人の思考、行動をどのように規定しているかを同化問題、他の日本の植民地・占領地（アイヌ・朝鮮・台湾・満州その他の日本の占領地）との比較を通して解明したい。

【授業の展開計画】

- 1 ナショナリズムとは
- 2 ナショナリズムの諸相
- 3 日本のナショナリズム
- 4 日本のナショナリズム
- 5 琉球併合について
- 6 沖縄の同化について
- 7 日本の植民地・占領地政策について
- 8 近代沖縄の思想
- 9 沖縄の反体制運動
- 10 復帰運動について
- 11 現在の沖縄のアイデンティティについて
- 12 現在の沖縄の思想・行動（保守と革新）
- 13 資料講読
- 14 資料講読
- 15 補足講義
- 16 テスト

【履修上の注意事項】

【評価方法】

評価の方法はレポートによる。テストは行わない。

【テキスト】

【参考文献】

平和思想

担当教員 安良城 米子

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

沖縄は日本国内でも世界情勢の変化を最も受けやすい位置にある。2001年の「9・11米中樞同時多発テロ事件」に見られるようなことである。そこで平和に対する思考、意識はその社会を安定的、発展的に成立させる最も基礎となる要因である。本講義では、まず琉球・沖縄の平和思想をその歴史から紐解く。特に1800年代の異国船の航海記から。そして戦後沖縄の平和運動にみる非暴力的抵抗の思想と行動の中から、沖縄の平和思想を見出したい。（展開計画へ続く）

【授業の展開計画】

【授業のねらい】の続き

同時に、マハトマ・ガンディーとマーティン・ルーサー・キングの「非暴力」思想と手段を概観する。平和構築の対処に非暴力の思想と手段がいかにかに現実的で効果的かを明らかにする。

【展開計画】

琉球に来航した異国船への琉球の人びとの対応は、あくまでも非軍事的対応であった。戦後においては米軍との折衝や抵抗の際「非暴力」での抵抗であったことなどを概観する。それが、現在の住民の基地建設反対の闘いに継承されている。

- 第1週 オリエンテーションー「一万年の旅路」ーイロコイ民族に伝わる口承史から
- 第2週 日本軍の沖縄県民観を通して
- 第3週 1797年～1854年前後：外来者を受容する琉球・
- 第4週 1950年代「土地闘争」ー阿波根昌鴻を通して
- 第5週 マハトマ・ガンディーの非暴力思想
- 第6週 マハトマ・ガンディーー南アフリカ滞在
- 第7週 マハトマ・ガンディーー非暴力への信念
- 第8週 マハトマ・ガンディーー幼年期のガンディー
- 第9週 マハトマ・ガンディーー「マイライフ・イズ・マイメッセージ」
- 第10週 マーティン・ルーサー・キング牧師ーエリートへの道
- 第11週 マーティン・ルーサー・キング牧師ー人種差別主義の哲学
- 第12週 マーティン・ルーサー・キング牧師ー「私には夢がある」
- 第13週 マーティン・ルーサー・キング牧師ー不服従運動ー市民的不服従
- 第14週 マーティン・ルーサー・キング牧師ー‘アヒムサ’と‘アガペー’
- 第15週 期末試験

【履修上の注意事項】

私語・携帯電話など周囲に迷惑のかかることは厳禁。

【評価方法】

毎回出席用紙を配布し、講義に関してのコメントを書いてもらう。それにより出席と授業姿勢をみる。レポートと試験を行い総合的に判断し評価する。

【テキスト】

『非暴力思想の研究』ーガンディーとキングー。毎時間レジュメを配布する。

【参考文献】

『異国船来琉記』須藤利一訳 法政大学出版局 『米軍と農民』阿波根昌鴻著 岩波書店
その他、その都度紹介する。

平和と法

担当教員 高良 鉄美

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

この講義では平和について法という分野からアクセスすることを主眼においている。平和の歴史、国際社会の平和機構はもちろんのこと、国内における平和主義とその体制、現実についても批判的に学習し、全体構造を捉えることを目的とする。日本における安全保障の構造と問題点などをともに考えて行きたい。

【授業の展開計画】

回数	講義内容説明
第1回	INTRODUCTION 講義内容説明
第2回	平和の概念 戦争との対比 何が必要か
第3回	平和主義思想 歴史的系譜 戦争の5W1H
第4回	カントの永久平和論
第5回	国際社会における平和機構 国際連盟とその機構
第6回	国際社会における平和機構 国際連合とその機構
第7回	平和主義 関連条約 平和と人権
第8回	日本国憲法の平和主義
第9回	自衛隊 安保体制
第10回	集団的自衛権 個別的自衛権 集団安全保障
第11回	人間の安全保障
第12回	国際社会における平和アプローチと憲法・条約・宣言
第13回	平和的法制度 平和的生存権
第14回	平和と法の構造力
第15回	期末試験
第16回	まとめ

【履修上の注意事項】

配布資料および準教科書で講義を進めていく。

【評価方法】

期末テストの成績、レポート及び出席点で評価する。
レポートは課題をいくつか出すのでその中から選択すること

【テキスト】

準教科書 「沖縄を平和学する」法律文化社

【参考文献】

マイノリティ論

担当教員 ダグラス トライカット

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

【授業の展開計画】

【履修上の注意事項】

【評価方法】

【テキスト】

【参考文献】

マスコミ論

担当教員 比嘉 要

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

【授業の展開計画】

【履修上の注意事項】

【評価方法】

【テキスト】

【参考文献】

民俗学 I

担当教員 萩原 左人

配当年次 2年

単位区分 選必

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

関連資格

備考

【授業のねらい】

民俗学は、土地に根ざした人々の暮らしや生き方に学ぶ学問として成立した。この講義では、日本の民俗学を確立した柳田国男の活動を中心としながら、民俗学の成り立ち・目的・方法などについて概観する。さらに、実際の農村・漁村・山村・都市などの民俗を紹介し、沖縄を含めて日本における民俗の多様性について理解を深めることを目的とする。

【授業の展開計画】

- 1) ガイダンス
- 2) 日本民俗学の成り立ち 1 民俗への関心
- 3) 日本民俗学の成り立ち 2 柳田国男の生涯
- 4) 日本民俗学の成り立ち 3 折口・南方・渋沢
- 5) 日本民俗学の成り立ち 4 日本民俗学と沖縄
- 6) 柳田国男の民俗学 1 目的
- 7) 柳田国男の民俗学 2 旅から調査へ
- 8) 柳田国男の民俗学 3 語彙と比較法
- 9) 稲作と農村の民俗
- 10) 畑作と農村の民俗
- 11) 漁撈と漁村の民俗
- 12) 山仕事と山村の民俗
- 13) 町場の民俗
- 14) 現代社会と民俗学
- 15) レポート提出

【履修上の注意事項】

【評価方法】

出席状況および期末レポートにより総合的に評価する。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献】

講義の際に紹介する。

民俗学Ⅱ

担当教員 萩原 左人

配当年次 2年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

民俗学は、土地に根ざした人々の暮らしや生き方に学ぶ学問として成立した。この講義では、具体的な事例や映像資料等を用いながら、民俗学のいくつかの分野についてその内容を紹介する。特に、本土地域と沖縄地域の民俗の違いについて留意しながら、地域の暮らしについての理解を深めることを目的とする。

【授業の展開計画】

- 1) ガイダンス
- 2) 社会の民俗1 ムラ（村落）
- 3) 社会の民俗2 イエ（家）
- 4) 社会の民俗3 イエ（家）2
- 5) 人の一生1 出産と成長
- 6) 人の一生2 若者
- 7) 人の一生3 老人
- 8) 人の一生4 死者
- 9) 人の一生5 墓について
- 10) 信仰と行事1 カミ観念
- 11) 信仰と行事2 暦と年中行事
- 12) 信仰と行事3 村落の祭司
- 13) 信仰と行事4 シャーマニズム
- 14) 信仰と行事5 異界と来訪神
- 15) レポート提出

【履修上の注意事項】

【評価方法】

出席状況およびレポート内容により総合的に評価する。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献】

講義の際に紹介する。

アジア考古学 I

担当教員 一島袋 晴美

配当年次 3年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

【授業の展開計画】

【履修上の注意事項】

【評価方法】

【テキスト】

【参考文献】

アジア考古学Ⅱ

担当教員 江上 幹幸

配当年次 3年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

東南アジアの人々が先史時代からどのような食生活をしてきたかを民族考古学的観点から学ぶ。フィールド調査で得た資料をもとに、映像を交えながら東南アジアの人々が持つ基層文化を取り上げ、伝統的食文化を分析する。

【授業の展開計画】

15回形式：

第1週～2週	先史時代の世界の食文化とは
第3週～5週	農耕の起源
第6週～7週	東南アジアの伝統的食文化
第8週～10週	伝統的な製塩法とは
第11週～12週	東南アジアのなかにみられるヤシ文化とは
第13週～14週	民族考古学的手法で東南アジアの伝統食文化を考える
第15週	まとめ

【履修上の注意事項】

意欲的な授業参加を求める。
他専攻の学生も歓迎する。

【評価方法】

授業への参加姿勢、レポートで総合的に評価する。

【テキスト】

適宜レジュメを配布する。

【参考文献】

石毛直道『食いしん坊の民族学』 中公文庫 1979 佐々木高明『照葉樹林文化とは何か』 中公新書 2007

アジアの社会と文化 I

担当教員 タゲラス トライタット

配当年次 3年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

【授業の展開計画】

【履修上の注意事項】

【評価方法】

【テキスト】

【参考文献】

アジアの社会と文化Ⅱ

担当教員 -赤嶺 政信 -前田 一舟

配当年次 3年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態

単位数 2.0

【授業のねらい】

【授業の展開計画】

【履修上の注意事項】

【評価方法】

【テキスト】

【参考文献】

アジア比較社会論

担当教員 河村 雅美

配当年次 3年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

テーマ：「映像から学ぶアジア社会」

この講義では、アジアを扱った映画、ドキュメンタリーなどの映像を素材として、アジア社会を理解することをねらいとします。講義では主にタイ、フィリピン、ベトナムなど東南アジアの映像をテーマ別に鑑賞し、フィリピンやインドネシアから来日する看護師・介護士、ジェンダーなどの身近な問題を絡め、アジア社会を学んでいきます。映像を見る私たちの視点についても考えていきます。

【授業の展開計画】

映像を鑑賞し、テーマにそってディスカッションすることで1セッションとします。まず、東南アジアとは何かについて背景を学びます。その後、「フィリピン・インドネシアの看護師・介護士問題」「ジェンダーとマイノリティ」「『文化』が違うとは？」「『ベトナム映画』とは何か？」の4つのテーマを予定しています。常に沖縄、日本の関係をひきつけながら考えていくことを意識していきます。

(受講生の関心などにより、テーマを変更することもあります。)

- 1 オリエンテーション
- 2 イントロダクション：背景知識としての東南アジア
- 3 最近のニュース映像・映画などを用いて
- 4 I フィリピン・インドネシアの看護師・介護士問題とその背景
- 5 映画『母と娘』（フィリピン）
- 6 ディスカッション
- 7 II タイ：ジェンダーとマイノリティ
- 8 ドキュメンタリー『性を越えた性』 映画『ビューティフル・ボーイ』など（タイ）
- 9 ディスカッション
- 10 III インドネシア：「文化」が違うとは？文献購読
- 11 ディスカッション
- 12 IV ベトナム：「ベトナム映画」とは何か？ ベトナム語なら？ベトナム人が作ったら？
- 13 映画『青いパイヤの香り』 その他
- 14 ディスカッション
- 15 「沖縄映画」とは何か？
- 16 まとめ・レポート提出

【履修上の注意事項】

自分から積極的にメディアなどの材料に触れていくことを厭わない学生さんの履修を望みます。留学生も大歓迎します。

【評価方法】

授業への参加姿勢（50点）、期末レポート（50点）を評価対象とします。以下を総合して評価します。

- ・授業での発言および課題を随時出すので、その提出状況。
- ・授業に対するリアクション・ペーパーの提出。

レポート：期末にレポートを課します。詳細は講義の中で提示します。

【テキスト】

授業では、レジユメを配布します。

【参考文献】

授業の中でテーマ毎に紹介します。

演習

担当教員 稲福 みき子

配当年次 3年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

沖縄を中心に周辺諸地域の民俗文化に関する基本的な論文を各自の関心に合わせて取り上げ、考察し、論文を作成するための基礎的な力を培うことをめざす。前期は、毎時間担当者を決め、レジュメを作り、発表を行い、質疑応答をする。夏期休暇に各自で調査を行う。後期は調査資料を整理、分析、考察して発表する。最終的にはそれらをまとめ、ゼミ調査レポート集を作成する。

【授業の展開計画】

前期

1 科目のオリエンテーション
2～13 論文のレジュメ発表と討論
14～15 夏期休暇中の調査計画

後期

1～10 調査報告と討論
11～15 調査レポートの作成

【履修上の注意事項】

【評価方法】

- ①出席を重視する。
- ②レジュメのまとめ方、発表力、調査力、討論への貢献度など総合的に評価する。

【テキスト】

講義の中で適宜紹介する。

【参考文献】

演習

担当教員 宮城 邦治

配当年次 3年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

基礎演習の集約的な演習であることから、前年度に決定した調査地とテーマを継続して調査するものである。これまでの調査で十分にデータができなかったことへの補足とデータの分析を中心として、次年度の卒業論文への繋ぎとなるものである。

【授業の展開計画】

- 前期) 「基礎演習」と「実習」で実施した調査候補地から、具体的な地域とテーマを決定し、調査を実施する。調査に際してメンバーを「自然班」「社会班」「文化班」に区分する。調査は毎月の金、土、日から実施可能な曜日一日を決め、できるだけ全員が参加して行い、その結果得られた情報や資料などについて、「演習」の際に報告させる。
- 後期) 前期同様に毎月の調査曜日一日を決め、前期に決めたグループを中心に調査を実施する。巡検、調査で得られた情報や資料などについては、「演習」の際に報告する。

【履修上の注意事項】

基礎演習、実習の継続的なものであることから、これまでの調査の反省と補足を十分におこなうこと。次年度の卒業論文の作成を見据えて、細やかな調査をおこなう事が肝要である。

【評価方法】

調査経過の発表と報告、授業への参加を勘案して評価する。

【テキスト】

調査地、テーマなどに関するテキスト、資料などは適宜告示または配布する。

【参考文献】

調査地、テーマなどの関する文献などは適宜告示または配布する。

演習

担当教員 上原 静

配当年次 3年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

発掘調査に参加し、調査技術の修得に努めるとともに、前年分の調査報告書を作成し、発掘調査の学術的意義について認識を深める。報告書の作成に際し、琉球諸島の先史古代文化を熟知する必要がある、そのため県内各地の考古学調査の成果を各自分担で整理発表し、知識を深める。

【授業の展開計画】

全員が遺物の整理（図表等の作成）を行う。遺跡の概況、調査経過等のほかの遺物の記述を行う。上記を通して報告書の作成を実地に学ぶ。各自分担して県内各地の先史文化を調査研究し、発表を行う。

【履修上の注意事項】

【評価方法】

【テキスト】

【参考文献】

文化財保護委員会『埋蔵文化財発掘調査の手引き』国土地理協会 1967

演習

担当教員 田名 真之

配当年次 3年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

2年次での基礎演習、実習を踏まえ、さらに一步踏み込んで南島歴史の世界を学ぶ。具体的には、前期前半は資料に関する知識、資料を扱う(読み解く)技術、歴史理論の向上を図るため論文を講読する。前期後半は事前に提示した課題から各自テーマを選択し、レポート作成と発表を行い、全員で批評、討論を行う。後期は各自でテーマを定めて、調査研究を行い、その成果を発表し、全員で批評、討論することを通して、課題や方向性を確認し、他のテーマについても学ぶ場とする。

【授業の展開計画】

前 期

1. 史資料と文献について
2. 史料の扱い方、読み方、歴史理論
3. 論文講読
4. レポート作成・発表－全員での批評、討論

後 期

1. 各自のテーマ設定
2. 調査研究
3. 成果の発表－全員での批評、討論

【履修上の注意事項】

論文講読や各自の調査研究発表では、担当者だけでなく、全員が参加して授業を進めること。ここで設定したテーマが卒論へ繋がることもあるはずなので、自身の発表、また全員での批評、討論を通じてテーマへの理解が深まるよう努めること。

【評価方法】

出席状況と討論など授業参加の姿勢、テーマへの取り組み、発表内容など総合的に評価する。

【テキスト】

プリントを配布。

【参考文献】

参考文献は適宜紹介。

演習

担当教員 澤田 佳世

配当年次 3年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

本演習は、社会学の基本的な概念や思考枠組を学ぶことからスタートし、現代社会を批判的に分析する（社会学的想像力）と（歴史的想像力）の習得を目的とする。文献輪読を通じて、個人的なことがらが社会全体とどのように関わっているのかを理解するとともに、自明視された「常識」や「カテゴリー」が歴史的にどのように構築されてきたのかを学び、自分自身で「問題」を発見する力を培う。さらに、ゼミでの討論を通じて、すべての人々が排除されないオールタナティブな視点と（暖かい知性）の涵養を目指す。

【授業の展開計画】

前期後期にわたり、選定した複数の課題文献について、毎回担当者を決めて報告してもらい、参加者全員で討論を行う。なお、4月は、2年次に作成した調査実習報告書の合評会を行う。

週	授 業 の 内 容	週	授 業 の 内 容
1	前期イントロダクション	17	講義②輪読文献の選定と発表形式の説明
2	調査実習報告書合評会①	18	文献報告
3	調査実習報告書合評会②	19	文献報告
4	調査実習報告書合評会③	20	文献報告
5	講義①輪読文献の選定と発表形式の説明	21	文献報告
6	文献報告	22	文献報告
7	文献報告	23	文献報告
8	文献報告	24	文献報告
9	文献報告	25	文献報告
10	文献報告	26	文献報告
11	文献報告	27	文献報告
12	文献報告	28	文献報告
13	文献報告	29	文献報告（理解を深める②ビデオ鑑賞）
14	文献報告（理解を深める①ビデオ鑑賞）	30	後期のふりかえり
15	前期のふりかえり	31	
16	後期イントロダクション		

【履修上の注意事項】

①文献報告の担当者は文献概要をまとめるだけでなく、該当するテーマについて他の著書や資料を用いて徹底的に調べ、論点と議論の題材を提起する。②報告担当者以外の学生も文献を精読し、質問と論点を毎回文章化して提出する。③卒論を念頭において、自分で興味のあるテーマを発見し、それについて自分でとことん調べ、考える続ける力を養う。一生懸命悩み考える学生には助力を惜しまない。自分で努力せず、本も読まず、教員にすぐに「答え」を聞いてくる学生は、一切サポートしない。

【評価方法】

出席、毎回の授業での討論への参加、レジュメの作成・発表、ゼミ論の発表・内容で総合的に評価する。

【テキスト】

受講生と相談のうえ選定するが、基本テキストは以下の2点。長谷川公一ほか『社会学』（有斐閣、2007）、アンソニー・ギデンズ『社会学』（而立書房、2006）。

【参考文献】

木下是雄『理科系の作文技術』（中央公論社、1981）、榎木伸明『卒論を書こう（第2版）』（三修社、2006）、早稲田大学出版部編『卒論・ゼミ論の書き方（第2版）』（早稲田大学出版部、2002）。

演習

担当教員 鳥山 淳

配当年次 3年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

この講義は、2年次の基礎演習および実習の体験と成果をふまえつつ、平和研究の視点と方法を学び、各自が取り組むテーマを発見していくことを課題とする。テキストの輪読を通して知的好奇心を高め、各自が掘り下げていくテーマを見出していくことが重要である。それと並行して、平和研究に関連する社会的な活動に関心を持ち、その実践の場に参加してみるという姿勢を持てるように、いくつかの機会を設定していく予定である。

【授業の展開計画】

前期は全員で輪読するテキストを選択し、内容報告や問題点の発見を繰り返しながら、問題意識を深める。それをふまえて、夏期休暇中に各自がレポートを作成し、休暇明けに報告する。後期は個別報告を中心としながら、4年次にかけて取り組むテーマを各自が見出していくプロセスとする。その際に、問題意識を共有するグループ作業を取り入れることも検討していく。また前期・後期を通して、平和研究に関連する活動について情報を集め、その取り組みに参加できる機会があれば積極的に足を運ぶようにしたい。

【履修上の注意事項】

各自が問題意識をもって参加すること。

【評価方法】

出席と参加姿勢によって評価する。

【テキスト】

指定しない。

【参考文献】

必要に応じて紹介する。

演習

担当教員 石垣 直

配当年次 3年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

本演習の目的は、「社会」や「文化」に対する問題意識を明確にし、文献研究、実地調査、論文作成などを通じて、その問題意識を深化させることにある。演習の前期には、社会・文化人類学ならびに民族学関連の著作・論文などを輪読し、各ゼミ生にレジュメ作成・発表をさせ、ゼミ生全体で議論を行う。夏期休暇中に各自で実地調査を行い、後期にはゼミ生間で調査成果を発表し議論を深める。最終的には各ゼミ生が調査・研究成果に基づいた文を作成し、これをゼミ全体としてまとめる（レポート集の作成）。

【授業の展開計画】

授業のねらいのつづき～

調査地域は沖縄本島および周辺離島に限定されるだろうが、テーマとしては「アジア」や「沖縄」にかんするものであればとくに制限を設けない。

（前期）

- ①オリエンテーション（第1回）
- ②各ゼミ生によるレジュメ作成・論文購読（第2～8回）
- ③各ゼミ生のテーマ設定（第9～13回）
- ④各ゼミ生の調査テーマにしたがった関連文献収集・整理（第9～13回）
- ⑤各ゼミ生の調査テーマにしたがった調査計画の策定（第14～16回）

（後期）

- ⑥各ゼミ生の調査・研究成果にかんする発表（第17～26回）
- ⑦各ゼミ生の調査・研究成果発表に対する質疑応答（第17～26回）
- ⑧調査・研究成果とゼミでの議論をもとにした論文作成（第27～30回）
- ⑨調査成果論文集の編集（第31、32回）

【履修上の注意事項】

通常の講義科目とことなり、演習では各ゼミ生のより一層の主體的参加が求められる。文献研究やゼミでの発表・質疑応答を通じて、（卒業論文のテーマも視野に入れて）各自の問題意識を深化させてほしい。

【評価方法】

出席（50%）、授業への参加姿勢（25%）、調査成果・論文評価（25%）。出席および演習への参加姿勢を重視する。その上で、調査成果や論文の完成度合いに応じて総合的に評価する。

【テキスト】

演習のなかで適宜紹介。

【参考文献】

演習のなかで適宜紹介。

沖縄現代史 I

担当教員 鳥山 淳

配当年次 3年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

この講義では、「占領と分断」「復帰への道のり」「問い直される沖縄戦」という3つのテーマから、沖縄の戦後史を考える。地上戦の終結とともに米軍占領下に置かれることになった沖縄の戦後史は、どのような問題を抱えることになったのか、それに対して人々は何を考え、どのような動きを生み出したのか。当時の記録や映像などを参照しながら考えていくことにしたい。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	イントロダクション
2	占領と分断 (1) 地上戦と占領
3	占領と分断 (2) アメリカの沖縄政策
4	占領と分断 (3) 対日講和条約
5	占領と分断 (4) 激化する軍用地問題
6	復帰への道のり (1) 復帰運動の始まり
7	復帰への道のり (2) 島ぐるみ闘争
8	復帰への道のり (3) ベトナム戦争と復帰運動
9	復帰への道のり (4) 沖縄返還協定
10	フィールドワーク
11	問い直される沖縄戦 (1) 住民体験を記録する
12	問い直される沖縄戦 (2) 告発される日本軍
13	問い直される沖縄戦 (3) 体験継承の取り組み
14	問い直される沖縄戦 (4) 教科書問題の中の沖縄戦
15	学期末試験
16	

【履修上の注意事項】

(なし)

【評価方法】

学期末テスト60% 小レポート20% 参加姿勢20%

【テキスト】

特定のテキストは指定せず、講義の際に必要な資料を配付する

【参考文献】

『戦後をたどる 「アメリカ世」から「ヤマト世」へ』（琉球新報社）、大城将保『沖縄戦を考える』（ひるぎ社）

沖縄現代史Ⅱ

担当教員 鳥山 淳

配当年次 3年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

この講義では、米軍や基地との関連を重視しながら、戦後沖縄の歩みをたどっていく。沖縄戦を生き延びた人々が戦後の出発点として経験した収容所の様子、基地の傍らで生活する人々によって作り出されたコザの街など、占領下の生活を象徴する歴史経験に目を向けたうえで、現在へとつながる問題を捉えるようにしたい。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	イントロダクション
2	収容所からの出発（1）基地建設と収容所
3	収容所からの出発（2）軍作業と戦果
4	収容所からの出発（3）生活再建の苦難
5	フィールドワーク
6	基地の街の歩み（1）帰郷を阻まれた人々
7	基地の街の歩み（2）歓楽街の形成
8	基地の街の歩み（3）Aサインとオフ・リミッツ
9	基地の街の歩み（4）ベトナム戦争とコザ暴動
10	フィールドワーク
11	復帰後も継続する問題（1）返還されない基地
12	復帰後も継続する問題（2）軍隊と性暴力
13	復帰後も継続する問題（3）基地と振興策
14	復帰後も継続する問題（4）普天間基地問題とヘリ墜落事故
15	学期末テスト
16	

【履修上の注意事項】

(なし)

【評価方法】

学期末テスト60% 小レポート20% 参加姿勢20%

【テキスト】

特定のテキストは指定せず、講義の際に必要な資料を配付する

【参考文献】

『庶民がつづる沖縄戦後生活史』（沖縄タイムス社） 『戦後をたどる「アメリカ世」から「ヤマト世」へ』（琉球新報社）

環境経済学 I

担当教員 呉 錫畢

配当年次 3年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

地球温暖化の問題がかつてなく大きくクローズアップされている今日である。何が地球環境問題をもたらしたのか。経済要因なきには語れない環境問題であるが、経済成長への優先は環境の犠牲をもたらす。しかし、環境を重視すれば経済成長の停滞を感受しなければならない。つまり経済成長と環境は効率と公正との緊張関係にあるのである。このような問題意識に基づいて、環境経済学の理論のみならず、身近な沖縄の環境問題を経済学の観点より分かりやすく解説する。そして、無味乾燥ではない五感で感じる環境経済学の講義になる。

【授業の展開計画】

- 1週目：環境と経済の話1
- 2週目：環境と経済の話2
- 3週目：環境問題と市場の失敗
- 4週目：環境破壊の経済的メカニズム
- 5週目：市場と外部経済
- 6週目：地球温暖化の経済学
- 7週目：二酸化炭素と生活
- 8週目：エネルギー経済
- 9週目：環境政策の手段
- 10週目：環境税と環境規制
- 11週目：排出権取引
- 12週目：沖縄経済の特徴
- 13週目：沖縄経済のディレンマ
- 14週目：沖縄経済発展と観光財
- 15週目：期末試験

【履修上の注意事項】

環境と経済に対して問題意識を持つこと。

【評価方法】

期末試験、レポート、出欠等を中心に評価する。

【テキスト】

呉錫畢 (2008) 『環境・経済と真の豊かさーテーゲー経済学序説ー』、日本経済評論社。

【参考文献】

- (1) 呉錫畢 (1999) 『環境政策の経済分析』、日本経済評論社。
- (2) 植田和弘 (1997) 『環境経済学』、岩波新書。その他、テーマに添って随時紹介する。

環境経済学Ⅱ

担当教員 呉 錫畢

配当年次 3年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

本講義は、沖縄のサンゴ礁の持つ生態系や景観のような自由財の非利用価値を測り、地域経済の発展や豊かさの観点より環境経済学の視点より概説する。そして、自然の尊さを沖縄サンゴ礁の貨幣評価で表現し、沖縄観光経済の現在と将来を診断するとともに、さらに沖縄文化でもあるテーゲーの経済学化を試み、真の豊かさとは何かについて考察し、さらに真の豊かさから見る経済発展の新たなパラダイムを提示する。

【授業の展開計画】

- 1週目：環境はいくらか
- 2週目：CVM(仮想市場評価法)
- 3週目：赤土汚染からみる沖縄の地域振興と開発の功罪
- 4週目：赤土汚染による生態系及び環境の損害評価
- 5週目：沖縄におけるサンゴ礁の現状
- 6週目：サンゴ礁の生態系及び景観の経済評価
- 7週目：環境と沖縄の観光経済
- 8週目：竹富島とピノキオ観光
- 9週目：成長するアイルランド観光
- 10週目：アイルランド観光経済と沖縄観光
- 11週目：沖縄経済と済州経済
- 12週目：沖縄と済州の観光産業
- 13週目：内発的発展からみる沖縄経済の発展可能性
- 14週目：真の豊かさとテーゲー経済学
- 15週目：期末試験

【履修上の注意事項】

環境と経済に対して問題意識を持つこと。

【評価方法】

期末試験、レポート、出欠等を中心に評価する。

【テキスト】

呉錫畢 (2008) 『環境・経済と真の豊かさーテーゲー経済学序説ー』、日本経済評論社。

【参考文献】

- (1) 呉錫畢 (1999) 『環境政策の経済分析』、日本経済評論社。
- (2) 植田和弘 (1997) 『環境経済学』、岩波新書。その他、テーマに添って随時紹介する。

外国語資料講読演習A I

担当教員 末吉 重人

配当年次 3年

単位区分 必

開講時期 前期

授業形態 演習

単位数 2.0

関連資格

備考

【授業のねらい】

社会学専攻の学生を対象とした本講義では、欧米の社会学理論を学ぶ際に必要な英語資料に備えるものとする。前期は米国の大学生がよく使うSOCIAL PROBLEMS（図書館所蔵）をテキストとする。同著には、家族（the family）、教育（education）等18個もの「社会問題」の概論が述べられている。

【授業の展開計画】

第1回 シラバスの説明

第2回 Chapter 1 Sociology and Social Problems 前半（担当末吉）と「くじ引き」

第3回 Chapter 1 Sociology and Social Problems 後半（担当末吉）

第4回以降 各グループによる発表

第15回 期末テスト

【履修上の注意事項】

講義中のどのタイミングでの質問も大いに歓迎する。私語は厳禁。退場もある。

【評価方法】

前期はグループ発表（40点）、期末テスト（40点）を行う。
前後期とも出席を20点とし、合計で評価する。

【テキスト】

前期：James W Coleman & Donald Clessey, 'SOCIAL PROBLEMS' (New York, Harper & Roe, Publications, 1984) - 図書館の指定図書。

【参考文献】

外国語資料講読演習A I

担当教員 安良城 米子

配当年次 3年

単位区分 必

開講時期 前期

授業形態 演習

単位数 2.0

関連資格

備考

【授業のねらい】

平和、文化そして環境問題に関する文献をある程度読みこなすことができることを目的とする。まず、基礎的な用語を学びながらリーディングのスキルが身に付けられるようにする。英文を読むという行為が、ただ単に文字を追いつつ受動的に情報を受け取るだけでなく、書かれた文章を理解する為には知的枠組みが重要である。その知的枠組みの強化も図りつつ進める。個別またはグループの共同学習を通して平和、文化、環境問題を習得する楽しみを味わってほしい。（展開計画に続く）

【授業の展開計画】

(授業のねらい 続き)

そして、英語を読む習慣を身に付けて学習を積み上げていく助けとなるよう興味を持てる内容の教材を提供する。
。（授業の展開計画）

前期では英語を楽しんで読むことから始めたい。同時に基礎的語彙、語句、慣用句などしっかりと見につけることを目指す。

- 第1週 オリエンテーション
- 第2週 Class and Politics
- 第3週 Class and Politics
- 第4週 Education
- 第5週 Education
- 第6週 Feminism
- 第7週 Feminism
- 第8週 Health and Age
- 第9週 Health and Age
- 第10週 Crime & Punishment
- 第11週 Crime & Punishment
- 第12週 Drugs Sports
- 第13週 Drugs Sports
- 第14週 復習
- 第15週 期末試験

【履修上の注意事項】

私語、携帯電話の使用など、周囲に迷惑のかかるような行為は厳禁。
英語の辞書を持参すること。

【評価方法】

出席状況、授業姿勢、発表、課題及び小テスト、そして期末試験を総合して評価する。
出席・授業姿勢（20%）、発表及び小テスト（30%）、期末試験（50%）

【テキスト】

『Life and Society in Modern Britain』（現代イギリスの暮らしと文化）英宝社を使用する。

【参考文献】

その都度、授業で紹介する。

外国語資料講読演習AⅡ

担当教員 末吉 重人

配当年次 3年

単位区分 必

開講時期 後期

授業形態 演習

単位数 2.0

関連資格

備考

【授業のねらい】

社会学専攻の学生を対象とした本講義では、欧米の社会学理論を学ぶ際に必要な英語資料に備えるものとする。後期は130頁強の理論書 POSTMODERNITY Second Editionを学ぶことにする。同著は社会学思想の比較的新しい材料を含んだ入門書である。なお、同著の推薦するハリソン・フォード主演の映画「ブレードランナー」（1992年）を視聴する。

【授業の展開計画】

第1回 講義：モダニティとは（担当末吉）と「くじ引き」
第2回 「ブレードランナー」上映（前半）
第3回 「ブレードランナー」上映（後半）と個人発表
第4回以降 個人発表
第14回 ペーパー提出
第15回 ポストモダン総括

【履修上の注意事項】

講義中のどのタイミングでの質問も大いに歓迎する。私語は厳禁。退場もある。

【評価方法】

後期は個人発表（40点）、期末ペーパー（小論40点）提出を課す。前後期とも出席を20点とし、合計で評価する。

【テキスト】

後期：David Lyon, POSTMODERNITY (Minneapolis, University of Minnesota Press, 1994) : 白鳥春彦『この一冊で「哲学」がわかる』三笠書房、638円

【参考文献】

外国語資料講読演習AⅡ

担当教員 安良城 米子

配当年次 3年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 演習

単位数 2.0

【授業のねらい】

平和、文化そして環境問題に関する文献をある程度読みこなすことができることを目的とする。まず、基礎的な用語を学びながらリーディングのスキルが身に付けられるようにする。英文を読むという行為が、ただ単に文字を追いつつ受動的に情報を受け取るだけでなく、書かれた文章を理解するためには知的枠組みが重要である。その知的枠組みの強化も図りつつ進める。個別またはグループの共同学習を通して平和、文化そして環境問題を習得する楽しみを味わってほしい。（展開計画へ続く）

【授業の展開計画】

（授業のねらい）

そして、英語を読む習慣を身に付けて学習を積み上げていく助けとなるよう興味を持てる内容の教材を提供する。

（授業の展開計画）

前期の基礎的文献の講読に加え、後期はより専門的な資料の講読に進む。環境問題の専門書である。専門用語を理解・整理すると同時に英語を読む習慣を保ち学習を積み上げていく助けとなるよう適時に小テストを実施する。

- 第1週 オリエンテーション
- 第2週 Religion
- 第3週 Religion
- 第4週 The Monarchy
- 第5週 The Monarchy
- 第6週 Love & Marriage
- 第7週 Love & Marriage
- 第8週 Environment
- 第9週 Environment
- 第10週 Immigration & Race
- 第11週 Immigration & Race
- 第12週 Ireland
- 第13週 Ireland
- 第14週 Europe
- 第15週 期末試験

【履修上の注意事項】

私語、携帯電話の使用など、周囲に迷惑のかかるような行為は厳禁。
英語の辞書を持参すること。

【評価方法】

出席状況、授業姿勢、発表、課題及び小テスト、そして期末試験を総合して評価する。
出席・授業姿勢（20%）、発表及び小テスト（30%）、期末試験（50%）

【テキスト】

【参考文献】

その都度、授業で紹介する。

外国語資料講読演習B I

担当教員 藤波 潔

配当年次 3年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 演習

単位数 2.0

【授業のねらい】

本講義は、社会文化学科文化コース3年次対象の必修科目であり、とくに歴史学・考古学を専攻する学生を対象としている。卒業論文作成にあたり、外国語の論文や資料を利用することは今や当然のことだが、外国語専門資料を正確に読解する能力が不足している学生が多いのが現実である。そこで、本講義では、歴史学・考古学の方法論に関わる英語の専門文献の精読をおこない、受講生が正確に英語を読解する能力を向上させることを目的としている。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	ガイダンス・小テスト
2	テキストの輪読①
3	テキストの輪読②
4	テキストの輪読③
5	テキストの輪読④
6	テキストの輪読⑤
7	テキストの輪読⑥
8	テキストの輪読⑦
9	テキストの輪読⑧
10	テキストの輪読⑨
11	テキストの輪読⑩
12	テキストの輪読⑪
13	テキストの輪読⑫
14	テキストの輪読⑬
15	テキストの輪読⑭ ※ 16回目に前学期末試験を実施する
16	

【履修上の注意事項】

- ① 外国語講読のための演習であり、受講生を不規則に指名するので、予習は不可欠である。
- ② 中辞典以上の英和辞書（同機能の電子辞書でも可）を必ず持参すること。
- ③ 文法に自信のない者は、高校レベルの文法書を用意し、復習しておくこと。
- ④ 出席は毎回必ずとる。

【評価方法】

出席状況（30%）、受講態度（10%）および学期末試験（60%）による総合評価とする。

【テキスト】

開講時に指示するが、テキストは必要な部分を印刷して配布する。

【参考文献】

適宜紹介する。

外国語資料講読演習 B I

担当教員 宮城 昌保

配当年次 3年

単位区分 必

開講時期 前期

授業形態 演習

単位数 2.0

関連資格

備考

【授業のねらい】

【授業の展開計画】

【履修上の注意事項】

【評価方法】

【テキスト】

【参考文献】

外国語資料講読演習BⅡ

担当教員 藤波 潔

配当年次 3年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 演習

単位数 2.0

【授業のねらい】

本講義は、社会文化学科文化コース3年次対象の必修科目であり、とくに歴史学・考古学を専攻する学生を対象としている。卒業論文作成にあたり、外国語の論文や資料を利用することは今や当然のことだが、外国語専門資料を正確に読解する能力が不足している学生が多いのが現実である。そこで、本講義では、歴史学・考古学の方法論に関わる英語の専門文献の精読をおこない、前期の講義をふまえ、受講生が正確に英語を読解する能力をさらに向上させることを目的としている。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	ガイダンス
2	テキストの輪読①
3	テキストの輪読②
4	テキストの輪読③
5	テキストの輪読④
6	テキストの輪読⑤
7	テキストの輪読⑥
8	テキストの輪読⑦
9	テキストの輪読⑧
10	テキストの輪読⑨
11	テキストの輪読⑩
12	テキストの輪読⑪
13	テキストの輪読⑫
14	テキストの輪読⑬
15	テキストの輪読⑭ ※ 16回目に後学期末試験を実施する
16	

【履修上の注意事項】

- ① 外国語講読のための演習であり、受講生を不規則に指名するので、予習は不可欠である。
- ② 中辞典以上の英和辞書（同機能の電子辞書も可）を必ず持参すること。
- ③ 文法に自信のない者は、高校レベルの文法書を用意し、復習しておくこと。
- ④ 出席は毎回必ずとる。

【評価方法】

出席状況（30%）、受講態度（10%）および学期末試験（60%）による総合評価とする。

【テキスト】

開講時に指示するが、テキストは必要な部分を印刷して配布する。

【参考文献】

適宜紹介する。

外国語資料講読演習 B II

担当教員 宮城 昌保

配当年次 3年

単位区分 必

開講時期 後期

授業形態 演習

単位数 2.0

関連資格

備考

【授業のねらい】

【授業の展開計画】

【履修上の注意事項】

【評価方法】

【テキスト】

【参考文献】

社会統計学 I

担当教員 宮国 忠広

配当年次 3年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

この講義は、社会調査のデータに関して、基本的な統計的分析を行なうための技術を身につけることが主な目的である。社会調査には、様々な種類があるが、調査の「仮説」の検定によって、「因果推論」を行う考察力を養い、統計的分析を用いた実際の分析例に数多く触れることで、統計的分析を通して社会現象の背後にある因果関係を解明することも講義の目標となる。例えば、開票率0%の段階で、なぜ、テレビの選挙速報で「当確」が出せるのか。様々な事例を紹介しながら、統計データを読み解く。

【授業の展開計画】

1. イントロダクション（本講義の目的と概要・他の講義との関連・スケジュール紹介）
2. 統計解析の基本を押さえてみよう
（社会調査で「何」を探るのか、統計によって「何」が明らかになるのか）
3. 確率論の基礎（統計の基礎となる確率・「確率変数」＝偶然に支配された「現象」）
4. 確率論の基礎・その2（二項分布の変化と正規分布＝誤差分布について）
5. 度数分布とは何か（各カテゴリーの回答者数について）
6. 代表値とは何か（分布の中心位置について考察・分析できること）
7. 範囲と標準偏差（分布の「ばらつき」からデータの性質を探ろう）
8. 歪度と尖度（集計データのグラフから、イメージを読み取ってみよう）
9. カイ2乗検定について・その1（クロス集計表でグループ間に差があるかないかを統計的に判断）
10. カイ2乗検定について・その2（適合度の検定と独立性の検定）
11. t検定と分散分析とは（平均値の差の検定・有意差を統計的に判断する）
12. 相関係数について（2つの変数から何が分かるのか）
13. 単回帰とは（相関関係を1次式で表現し「予測」に用いる手法・相関係数散布図と単回帰式の組み合わせ）
14. シグマ値法（各カテゴリーの得点化・カテゴリーの換算点）
15. 本講義のまとめ（レポート提出）

【履修上の注意事項】

PC・エクセルを使用する場合がある。

【評価方法】

出席・受講態度・期末試験（レポート）を総合的に評価

【テキスト】

酒井隆著『図解アンケート調査と統計解析がわかる本』日本能率協会マネジメントセンター、2003年10月1日

【参考文献】

プリント等を配布する

社会統計学Ⅱ

担当教員 宮国 忠広

配当年次 3年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

「社会統計学Ⅰ」の講義内容を踏襲し、社会統計学のメインとなる「多変量解析法」について学習する。統計分析における基本的な考察方法と計量モデルを分かり易く解説していく。基本となる「重回帰分析」の理論、技術的な方法を学習しながら、他の計量モデルを参考にし、社会統計学の「量的」意味合いを考察・検討していく講義の内容とする。

【授業の展開計画】

1. 「社会統計学Ⅰ」で学習した内容を再考察
2. 多変量解析の種類について（基準変数解析・相互依存変数解析・その他）
3. 重回帰分析・その1（将来予測）
4. 重回帰分析・その2（関連性の説明）
5. プロビット分析について（0から1の間の比率とは）
6. 数量化Ⅰ類について（広告注目率予測モデル式に使われる解析手法）
7. コンジョイント分析（新製品コンセプトのマーケティング）
8. 判別分析（ヘビーユーザーとライトユーザー）
9. ロジスティック回帰分析（医療の領域で開発されたリスク要因の解析手法）
10. 数量化Ⅱ類（カテゴリーデータを用いて判断しよう）
11. 因子分析について（消費者の心理とイメージ）
12. クラスタ分析について（多変量解析結果から活用まで）
13. 共分散構造分析（因果関係のモデル化・パス解析モデルと因子分析）
14. 階層化意思決定分析法（AHP）・本講義のまとめ
15. テスト（レポート提出）

【履修上の注意事項】

PC・エクセルを使用する場合がある。

【評価方法】

出席・受講態度・期末試験（レポート）を総合的に評価

【テキスト】

酒井隆著『図解アンケート調査と統計解析がわかる本』日本能率協会マネジメントセンター、2003年10月1日

【参考文献】

プリント等を配布する

都市社会学Ⅰ

担当教員 桃原 一彦

配当年次 3年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

都市社会学Ⅰでは「都市（化）という現象を社会的に解説する」こと、つまり都市社会学の理論的視座を学び、近・現代都市の諸側面を実践的に理解していくための内容とする。理論の基本的視座に関してはアメリカ・シカゴ学派、およびフランス・マルクス主義「新都市社会学」、そして日本の都市社会学理論までを学史的に取り上げていく。また実践的な学習としては、インナーエリア空間の特質、都市エスニシティと貧困・差別問題、抵抗としてのマイノリティ文化の創造など、都市社会の諸側面を考えていく内容とする。

【授業の展開計画】

毎回の講義に際しては、前回講義の「おさらい」的な応答で開始する。次に、講義の本題に入ると基本的に教員からの「発話」が中心となるが、適宜、受講生個人またはグループで学習してもらう。グループ学習は主にワークショップ形式をとるので、あまり緊張せずにリラックスして挑んで欲しい。

週	授 業 の 内 容
1	都市社会学的研究の意義
2	「都市」「都市化」とは何か？—都市社会学の基本的視座—
3	都市社会への理論的まなざし①—近代ヨーロッパ都市と分節化の政治—
4	—合理性、知性、市場経済
5	—野蛮性、収奪、奴隷
6	都市社会への理論的まなざし②—移民国家アメリカの都市社会とシカゴ学派
7	—アメリカ合衆国の都市化とその歴史的背景
8	—シカゴ学派の理論的枠組み（形式社会学／進化論／生態学）
9	—同心円地帯モデルと進化の空間図式
10	—映像でみるアメリカ都市の空間構造
11	都市社会への理論的まなざし③—デュボイスの都市研究とブラックソシオロジー
12	—デュボイスの都市研究とその功績
13	—ブラックソシオロジーの再検討
14	—マイノリティへのまなざしと身体・空間の政治
15	都市社会学Ⅰの総括
16	

【履修上の注意事項】

本講義は個人による課題提出、またはワークショップ形式のグループ学習を取り入れるので、受講生自ら積極的に関わるように。また出席確認をとる。

【評価方法】

個人またはグループでの課題の提出物の内容（50%）、グループ学習への参加度とプレゼンテーションの内容（30%）、出席および受講状況（20%）の割合で評価する。

【テキスト】

テキストはとくにないが、適宜紹介する。

【参考文献】

町村敬志、西澤晃彦著『都市の社会学』有斐閣・見田宗介、他編『現代社会の社会学』岩波書店
その他、講義の中で適宜紹介していく。

都市社会学Ⅱ

担当教員 桃原 一彦

配当年次 3年

単位区分 選必

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

関連資格

備考

【授業のねらい】

都市社会学Ⅱでは、今日の都市社会学研究において注目を集める「空間論」「権力論」をベースに、郊外空間（サバービア）や大衆消費社会的都市空間について考える講義内容とする。とくに、郊外空間を社会的に読み解くうえで戦後日本の「アメリカニズム」の文脈をとらえるカルチュラルスタディーズの視座や、集会的消費空間（ショッピングモールなど）を読み解くうえで重要な「テーマパーク論」を紹介し、受講生の実践的な学習のなかで応用してもらおう。

【授業の展開計画】

毎回の講義に際しては、まず冒頭で前回の講義内容に関する「おさらい」的な応答で開始する。次に、講義の本題に入ると基本的に教員からの「発話」が中心となるが、適宜、受講生個人またはグループで学習してもらおう。グループ学習は主にワークショップ形式をとるので、あまり緊張せずにリラックスして挑んで欲しい。

週	授 業 の 内 容
1	都市社会学Ⅱへの招待
2	日本における近代的都市化①—1920年代を中心に
3	日本における近代的都市化②—1950年代後半～1960年代を中心に
4	日本における近代的都市化③—1980年代後半～90年代初頭を中心に
5	日本における都市社会学の展開①—結節機関論と「正常人口の正常生活」概念
6	日本における都市社会学の展開②—第三の空間論とコミュニティ研究
7	日本における都市社会学の展開③—エスニシティ研究と世界都市論の台頭
8	日本における都市社会学の展開④—マルクス主義の波及と資本・国家・空間の文脈
9	日本における都市社会学の展開⑤—空間の生産主体論と都市エスノグラフィ
10	空間の権力性に関する理論的視座①—空間の権力性に関する理論的視座
11	空間の権力性に関する理論的視座②—「郊外」というせめぎあう舞台
12	空間の権力性に関する理論的視座③—アメリカ化／マクドナルド化と集会的消費
13	空間の権力性に関する理論的視座④—テーマパーク論のテキスト
14	空間の権力性に関する理論的視座⑤—郊外化する沖縄の都市空間とショッピングモール
15	都市社会学Ⅱの総括
16	

【履修上の注意事項】

本講義は個人による課題提出、またはワークショップ形式のグループ学習を取り入れるので、受講生自ら積極的に関わるように。また出席確認をとる。

【評価方法】

個人またはグループでの課題の提出物の内容（50%）、グループ学習への参加度とプレゼンテーションの内容（30%）、出席および受講状況（20%）の割合で評価する。

【テキスト】

テキストはとくにないが、適宜紹介する。

【参考文献】

町村敬志、西澤晃彦著『都市の社会学』有斐閣・見田宗介、他編『現代社会の社会学』岩波書店
その他、講義の中で適宜紹介していく。

南島先史学 I

担当教員 上原 静

配当年次 3年

単位区分 選択

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

関連資格

備考

【授業のねらい】

先史文化の概観に先立ち、琉球列島がいつ、どのように出来上がったか、地質学上の成果を紹介する。その後に、旧石器時代、縄文時代の人々の生活文化とその島嶼における適応の過程について概説する。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	琉球列島の成立
2	沖縄諸島の成立
3	八重山諸島の成立
4	島尻海
5	琉球珊瑚海
6	段丘時代の森
7	琉球諸島の動物
8	宮古ピンザアブ
9	化石人類
10	沖縄諸島の先史時代
11	先史文化の特徴
12	ヒトと沖縄の島
13	動物遺体と植物遺体
14	沖縄人の起源
15	前期末テスト
16	

【履修上の注意事項】

遅刻、欠席は減点の対象とする。

【評価方法】

受講姿勢、レポート、テストを総合して評価する。

【テキスト】

適宜指導する。

【参考文献】

沖縄の考古学、地質学に関する専門図書、報告書

南島先史学Ⅱ

担当教員 上原 静

配当年次 3年

単位区分 選択

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

沖縄諸島および先島諸島に展開した先史時代の文化を概観する。まず、沖縄諸島の新石器文化について、縄文時代とそれ以降について分けて概説し、沖縄固有の文化がどのような過程で形成されてきたのかをみる。その次に沖縄諸島と起源を異にする宮古・八重山諸島の先史文化を紹介し、その特質を探る。

【授業の展開計画】

週	授 業 の 内 容
1	講義概要の説明、沖縄考古学の歩み
2	沖縄の先史編年
3	沖縄の旧石器時代 詳説
4	〃
5	沖縄の縄文時代 詳説
6	〃
7	〃
8	〃
9	沖縄の弥生～平安平行期 詳説
10	〃
11	〃
12	〃
13	先島諸島の先史時代 詳説
14	〃
15	後期学期末試験
16	

【履修上の注意事項】

遅刻、欠席は減点の対象とする。

【評価方法】

受講姿勢、レポート、テキストを総合して評価する。

【テキスト】

適宜指導する。

【参考文献】

沖縄の考古学に関する専門図書、発掘調査報告書

南島の民俗社会 I

担当教員 高江洲 敦子

配当年次 3年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

本講義では、前半で南島の村落（シマ）の成り立ちや、その展開について概観し、そのあとで、シマ人の社会生活（主に近代）について講義をすすめる。後半では、南島の民間巫女ユタを取り上げ、その成立や巫女過程、さらに社会的歴史的役割とその変遷などについて、民俗学からの視点はもとより、歴史学における巫女研究の成果についても紹介しながら、シマ人の信仰習俗の様相についても講義を行う。

【授業の展開計画】

- 1週目 : 講義内容紹介・講義日程確認
- 2週目 : 社会と生活①（シマの成り立ち）
- 3週目 : 社会と生活②（シマの展開）
- 4週目 : 社会と生活③（シマの行政組織）
- 5週目 : 社会と生活④（シマの与く組組織）
- 6週目 : 社会と生活⑤（シマの労働慣行）
- 7週目 : 社会と生活⑥（シマの掟と制裁）
- 8週目 : 中間試験
- 9週目 : シマの信仰①（女性神人と民間巫女）
- 10週目 : シマの信仰②（ユタ成立・ユタ弾圧）
- 11週目 : シマの信仰③（ユタの成巫過程）
- 12週目 : シマの信仰④（ユタの職能：近世の職能 i）
- 13週目 : シマの信仰⑤（ユタの職能：近世の職能 ii）
- 14週目 : シマの信仰⑥（ユタの職能：近世の職能 iii）
- 15週目 : シマの信仰⑦（ユタの職能：近世の職能 iv）
- 16週目 : 学期末試験

【履修上の注意事項】

遅刻や私語（携帯電話使用）、授業開始後の無断での教室への出入りを慎む。

【評価方法】

中間試験・学期末試験及び、講義への参加姿勢によって評価する。
なお、出席日数が3分の2に満たない場合は、原則として単位を与えない。

【テキスト】

特になし。講義毎にレジュメ、資料を配布する。

【参考文献】

講義時に随時紹介する。

南島の民俗文化 I

担当教員 宮平 盛晃

配当年次 3年

単位区分 選必

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

関連資格

備考

【授業のねらい】

日本南西端に位置する亜熱帯の島々「沖縄」には、様々な民俗文化が息づいてきた。しかし、沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島など「沖縄」という言葉でくくられる島々の民俗文化は決して一様ではない。講義では、沖縄の集落・聖地・神役・家族・親族・年中行事・人生儀礼・祖先祭祀などをテーマに取り上げ、「沖縄」の民俗文化、その地域性の理解を目指す。それを通じて、受講生自身に共通する文化や異質な文化から、自分自身を見つめ直してもらいたい。

【授業の展開計画】

1. 集落
2. 聖地 (1)
3. " (2)
4. 神役
5. 年中行事 (1)
6. " (2)
7. " (3)
8. 親族
9. 人生儀礼 (1)
10. " (2)
11. 祖先祭祀 (1)
12. " (2)
13. 風水(家と墓) (1)
14. " (2)
15. 妖怪

【履修上の注意事項】

【評価方法】

出席状況とレポート(最終講義日に発表)によって総合的に評価する。

【テキスト】

講義は、毎回配布するレジュメに沿って、スライド(写真、映像)を用いながら行う。

【参考文献】

参考文献は随時、紹介する。

南島の民俗文化Ⅱ

担当教員 高江洲 敦子

配当年次 3年

単位区分 選必

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

関連資格

備考

【授業のねらい】

沖縄の民俗宗教は、御嶽や火の神に対する固有の信仰をもちつつも、14世紀から16世紀にかけての日本本土・中国・韓国など、東アジア各地域との交流のなかでさまざまな外来宗教の影響を受け、その神仏を受容してきた。

本講義では、まず沖縄の固有信仰について概説したのち、沖縄の民俗宗教における外来宗教の受容とその変容について講義をおこなう。

【授業の展開計画】

- 1週目：講義内容紹介・講義日程確認
- 2週目：沖縄の固有信仰①（御嶽信仰）
- 3週目：沖縄の固有信仰②（火神信仰）
- 4週目：日本本土からの勧請神①（権現と霊石〈琉球の七社〉）
- 5週目：日本本土からの勧請神②（権現と霊石〈農村の権現〉）
- 6週目：日本本土からの勧請神③（地藏）
- 7週目：日本本土からの勧請神④（荒神）
- 8週目：日本本土からの勧請神⑤（セーヌ神）
- 9週目：日本本土からの勧請神⑥（エビス〈夷〉）
- 10週目：中間試験。
- 11週目：中国大陸からの勧請神①（土帝君）
- 12週目：中国大陸からの勧請神②（閔帝・竜王）
- 13週目：中国大陸からの勧請神③（天妃）
- 14週目：中国大陸からの勧請神④（天尊）
- 15週目：中国大陸からの勧請神⑤（孔子）
- 16週目：学期末試験。

【履修上の注意事項】

遅刻や私語（携帯電話使用）、授業開始後の無断での教室への出入りを慎む。

【評価方法】

中間試験・学期末試験及び、講義への参加姿勢によって評価する。
なお、出席日数が3分の2に満たない場合は、原則として単位を与えない。

【テキスト】

特になし。講義毎にレジュメ、資料を配布する。

【参考文献】

平敷令治、『沖縄の祭祀と信仰』 第一書房 1990。
窪 徳忠、『増訂 沖縄の習俗と信仰』 東京大学東洋文化研究所 1974。

比較民俗学Ⅰ

担当教員 稲村 務

配当年次 3年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 前期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

比較民俗学の研究方法について考える。近年、人類学のなかで注目されている自文化研究という事態を鑑みながら、民俗学について「比較」「対照」を方法的に用いるための基礎的な問題群について主に中国の民俗を中心に講義します。

【授業の展開計画】

- 1 ポストモダン人類学と比較民俗学
- 2 柳田国男の比較民俗学
- 3 南方熊楠～千葉徳爾の比較民俗学
- 4 最近の比較民俗学
- 5 比較と対照、
- 6 民俗調査とデジタルアーカイブス
- 7 民俗翻訳論の課題
- 8 民俗対照論：通文化研究
- 9 大伝統と比較論・民俗対照論
- 10 民俗比較論の視角 華僑と日系人の民俗
- 11 中国の民俗学と民族学
- 12 雲南少数民族の世界
- 13 雲南のハニ族と東南アジアのアカ族
- 14 「文化」と「民俗」の政治学：沖縄と琉球
- 15 まとめ 自民族中心主義について

【履修上の注意事項】

民俗学・人類学の講義を履修済みであることが望ましい。

【評価方法】

レポートを重視する

【テキスト】

使用しない。適宜プリントを配布する。

【参考文献】

講義中に紹介する。

比較民俗学Ⅱ

担当教員 神谷 智昭

配当年次 3年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

比較民俗学の研究方法について考える。近年、人類学のなかで注目されている自文化研究という事態を鑑みながら、民俗学について「比較」「対象」を方法的に用いるための基礎的な問題群について主に韓国の民俗を中心に講義します。

【授業の展開計画】

1. 韓国概況紹介
2. 韓国の歴史1
3. 韓国の歴史2
4. 韓国の歴史3
5. 韓国の農村生活
6. 韓国の年中行事
7. 墓と「門中」
8. 儒教と仏教と巫俗
9. 韓国の食文化
10. 韓国の住文化
11. 文化と感情
12. 民俗の変化
13. 韓国と沖縄
14. 韓国の民俗学と人類学
15. まとめ

【履修上の注意事項】

民俗学・人類学の講義を履修済みであることが望ましい。

【評価方法】

レポートあるいはテストによって評価する。

【テキスト】

使用しない。適宜プリントを配布する。

【参考文献】

琉中交流史

担当教員 深澤 秋人

配当年次 3年

単位区分 選必

関連資格

備考

開講時期 後期

授業形態 一般講義

単位数 2.0

【授業のねらい】

この講義のねらいは、14世紀後半から19世紀後半にわたる琉球・中国交流史を、変化する東南アジアと東アジア（海域アジア）の国際環境のなかで考えるところ、琉球史の問題として考えるところ、なかでも、琉球王国や王権だけでなく、琉球社会を構成する地域や集団にとっての意味を考えるところにあります。琉球・中国交流史は琉球と中国の二国間関係史（交渉史・貿易史）であることを信じて疑わない（疑おうとしない）考え方から抜け出すことが到達目標です。

【授業の展開計画】

10～12回目の講義では、福州や北京を調査した成果を踏まえ、近年の都市の様子を紹介します。

- 1) 戦前から現在にいたる琉中交流史の研究をとりまく環境について解説します。
- 2) 14世紀後半の国際環境の変化が琉球の国家形成に与えた影響を考えます。
- 3) 15世紀の海域アジア世界の流通において琉球が果たした役割を考えます。
- 4) 琉球と後期倭寇との関係を中心にして16世紀の海域アジア世界を考えます。
- 5) 海域アジア世界における那覇の性格が16世紀末期に変化する問題を考えます。
- 6) 明清交替期の南明政権、清朝、鄭成功、靖南王と琉球との関係について考えます。
- 7) 近世における琉球王権のありかた、王権にとっての冊封の意味を考えます。
- 8) 近世の対中国貿易の輸出品である銀を琉球がどのように獲得していたのかを考えます。
- 9) 琉球と中国との通交が琉球社会の生産や労働にどのような影響を与えたのかを考えます。
- 10) 「中国大陸3000キロ踏査行」のビデオを見て、20世紀の研究環境を考えます。
- 11) 福州での琉球使節の活動を福州琉球館、琉球人墓をキーワードにして考えます。
- 12) 北京での琉球使節の活動を会同館、皇帝謁見、琉球人墓をキーワードにして考えます。
- 13) 琉球と中国との通交停止を1870年代の琉球・中国・日本関係から考えます。
- 14) 14世紀から19世紀にいたる琉球・中国交流史の流れを振り返ります。
- 15) 期末試験

【履修上の注意事項】

この講義で問われるのは暗記力ではありません。好奇心と着眼点です。覚えるのではなく、疑問点を見つけて考えようとしてください。漫然と出席しては自分で疑問点を見つけることはできません。一つでも多くの「発見」をすることを意識してください。

【評価方法】

基本的には期末試験の結果によって評価します。試験問題は記述問題（50点配点、15問×3点、1問×5点）と論述問題（50点配点）です。配布したレジュメや自分のノートなど何を見ても構いません。ほかにも、講義に参加する姿勢や意欲を重視します。場合によっては加点・減点することがあります。

【テキスト】

ありません。毎回、レジュメと図版などの参考資料を配布します。

【参考文献】

桃木至朗編『海域アジア史研究入門』（岩波書店、2008年）、研究史のなかで重要視されているものは1回目の講義で紹介します。各回の参考文献はレジュメで紹介します。

卒業論文指導演習

担当教員 稲福 みき子

配当年次 4年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

各自の設定したテーマに従って、文献検索・調査・資料整理・論文作成をおこなう。前期に文献調査と論文の書き方の基礎知識、資料の収集方法を検討し、夏期休暇中に調査を実施、後期は資料の整理と論文作成にあたる。

【授業の展開計画】

前期・後期

- 1 論文テーマを決める
- 2 テーマに沿った文献の検索と整理を行う
- 3 調査地、方法を検討する
- 4 テーマの意義、研究史、調査計画を発表する
- 5 調査実施後の整理と検討
- 6 論文の執筆
- 7 論文の提出
- 8 卒論発表会を行う

【履修上の注意事項】

研究計画書を提出することおよび調査の経過報告をおこなうこと。また、本演習を履修して卒業論文を提出した場合は、さらに4単位を認定する。卒業論文の要件を満たせず、演習レポートとなる場合は本演習4単位のみ認定する。

【評価方法】

論文作成過程、調査への取り組み、論文の内容によって評価する。

【テキスト】

個別テーマに応じて紹介する。

【参考文献】

卒業論文指導演習

担当教員 宮城 邦治

配当年次 4年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

基礎演習、実習、演習などを通して調査してきたテーマを、卒業論文としてまとめることが目的であり、そのための指導をおこなうものである。

【授業の展開計画】

- 前期) 「基礎演習」「演習」で調査してきたテーマを各自で「卒業論文」としてまとめることを指導する。提出された資料や原稿などを吟味し、補足調査が必要なものについては再度調査を行わせる。
- 後期) 前期で確定した原稿を、詳細にチェックして「卒業論文」としての最終稿を用意させる。提出締め切り日は社会文化学科の取り決めにより厳守させる。

【履修上の注意事項】

これまでに調査してきたテーマを暫時まとめて報告発表すること。環境学を専攻する学生は極力、卒業論文をまとめるよう努力すること。

【評価方法】

調査テーマの報告発表と授業への参加および卒業論文の作成提出などを勘案して評価する。

【テキスト】

卒業論文の調査テーマに関連するテキストなどは適宜告示する。

【参考文献】

卒業論文の調査テーマに関する資料、文献などは適宜告示または配布する。

卒業論文指導演習

担当教員 上原 静

配当年次 4年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

各自、関心のあるテーマを設定する。
遺跡の報告書をもって卒業論文にかえることもある。

【授業の展開計画】

関心のあるテーマについて、学史を調べリポートを作成する。
夏期休暇までに、卒論の骨子をまとめ、簡単な肉付けをする。
後期に不備な点を補い、本格的な執筆にはいる。

【履修上の注意事項】

3分の2以上出席すること。
遅刻・欠席は減点の対象とする。

【評価方法】

課題レポートや論文の内容

【テキスト】

個別テーマに応じて随時推薦する。

【参考文献】

卒業論文指導演習

担当教員 田名 真之

配当年次 4年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

卒業論文の作成に向けて、各自テーマを設定し、文献、史料の調査、収集を行い、論文の目次、構成を考え、中間報告、進捗状況報告などを経て、論文を完成させる。

【授業の展開計画】

1. 各自テーマを設定する
2. 年間スケジュールを立てる
3. テーマに沿って文献、史料の調査、収集を行う
4. 論文の目次の作成
5. 先行研究の概要報告（7月）
6. 中間報告（10月）
7. 下書き原稿作成（12月）
8. 論文提出（1月下旬）

【履修上の注意事項】

毎回出席し、他の報告にも質疑応答など積極的に参加すること

【評価方法】

卒論への取り組み、卒論の内容により評価

【テキスト】

【参考文献】

全員、及び各自に対する参考文献は適宜紹介する

卒業論文指導演習

担当教員 澤田 佳世

配当年次 4年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

本演習では、自分で関心のあるテーマを設定し、そのテーマについて自分自身で徹底的に調べ・悩み・考え、〈社会学的想像力〉と〈歴史的想像力〉を駆使しながら、先行研究の知見と現地調査に基づいて卒業論文の作成を行う。

【授業の展開計画】

前期にテーマの焦点化と先行研究の整理を行い、論文概要（テーマ、目的、問題の所在、仮説、予備的章立て、文献リスト）と研究計画（調査研究手法）について口頭発表してもらう。夏期休暇中には、各自、研究計画をもとに現地調査を実施する。後期には、調査結果を整理・分析して中間報告を行いつつ、各自卒業論文を完成させ提出する。その後、卒業論文報告会で口頭発表を行う。

週	授業の内容	週	授業の内容
1	イントロダクション	17	個人報告②（中間報告）
2	講義①卒論作成までのプロセス	18	個人報告②（中間報告）
3	講義②卒論の書き方	19	個人報告②（中間報告）
4	個人報告①（論文概要と研究計画）	20	個人報告②（中間報告）
5	個人報告①（同上）	21	個人報告②（中間報告）
6	個人報告①（同上）	22	個人報告②（中間報告）
7	個人報告①（同上）	23	個人報告②（中間報告）
8	個人報告①（同上）	24	個人報告②（中間報告）
9	個人報告①（同上）	25	個人報告②（中間報告）
10	個人報告①（同上）	26	個人報告②（中間報告）
11	個人報告①（同上）	27	卒論仮提出（12月第3週金曜日）
12	個人報告①（同上）	28	個別指導
13	個人報告①（同上）	29	卒論本提出（1月）
14	個人報告①（同上）	30	卒業論文発表会（2月上旬、個人報告③）
15	個人報告①（同上）	31	
16	講義③卒論の形式と決まり		

【履修上の注意事項】

- ①自分で興味のあるテーマを設定し、それについて自分でとことん調べ、考える続ける努力が必要である。一生懸命悩み考える学生には助力を惜しまない。自分でなんの努力もせず、本も読まず、すぐに教員に「答え」を聞いてくる学生は、一切サポートしない。
- ②本演習を履修し卒業論文を提出した者は、本演習の4単位と卒業論文の4単位の「合計8単位」を取得する。
- ③卒業論文の提出要件を満たさない者は、ゼミ論の提出により「本演習4単位」を取得する。

【評価方法】

卒業論文作成過程（ゼミの出席状況も含む）、口頭発表、討論への参加、卒業論文の内容で総合的に評価する。

【テキスト】

以下3冊。木下は雄『理科系の作文技術』（中央公論社、1981）、榎木伸明『卒論を書こう（第2版）』（三修社、2006）、早稲田大学出版部編『卒論・ゼミ論の書き方（第2版）』（早稲田大学出版部、2002）。

【参考文献】

個別テーマに応じて適宜紹介する。

卒業論文指導演習

担当教員 鳥山 淳

配当年次 4年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

各自が選択したテーマに沿って考察と調査を進め、その成果を卒業論文としてまとめることができるように、継続的に作業を進める。そのために必要とされる研究方法の修得・資料の収集・調査の実践について、ゼミの場で報告・議論しながら進めていく。

【授業の展開計画】

前期は、まず各自がテーマを決定し、自分の論文を作成するために必要とされる作業を把握できるようにする。そのうえで、夏期休暇中に本格的な調査を進めることができるよう、ゼミ準備を進める。その進捗状況について、ゼミでの報告を求める。

後期は、それまでの調査をまとめて中間報告を行ったうえで、論文の完成に向けて作業を進める。

【履修上の注意事項】

自ら考え、主体的に取り組む覚悟をもって履修すること。

【評価方法】

論文作成に向けた取り組みと提出された論文に基づいて評価する。

【テキスト】

指定しない。（各自で積極的に情報を集めること）

【参考文献】

指定しない。（各自で積極的に情報を集めること）

卒業論文指導演習

担当教員 石垣 直

配当年次 4年

単位区分 必

関連資格

備考

開講時期 通年

授業形態 演習

単位数 4.0

【授業のねらい】

本演習の目的は、基礎演習と実習（2年生）および演習（3年生）で学んできた成果を踏まえ、各ゼミ生自らが設定する研究テーマにそって、文献収集・研究、調査計画設定、実地調査、調査・研究成果の整理・分析をへて、卒業論文を作成することにある。夏期休暇などを利用して各自で現地調査を実施し、後期には調査・研究成果の発表・議論をへて卒業論文の作成を目指す。

【授業の展開計画】

- ①オリエンテーション（第1回）
- ②学術論文作成方法（第2～3回）
- ③各ゼミ生によるレジュメ作成・論文購読（第4～13回）
- ④各ゼミ生の卒業論文テーマ設定（第4～13回）
- ⑤各ゼミ生の調査テーマにしたがった関連文献収集・整理（第4～13回）
- ⑥各ゼミ生の調査テーマにしたがった調査計画・論文執筆計画の策定（第14～16回）
（後期）
- ⑦各ゼミ生の調査・研究成果にかんする発表（第17～26回）
- ⑧各ゼミ生の調査・研究成果発表に対する質疑応答（第17～26回）
- ⑨調査・研究成果とゼミでの議論をもとにした論文作成・指導（第27～30回）
- ⑩調査成果報告書の編集・発行（第31、32回）

【履修上の注意事項】

卒業論文作成のためのゼミである本演習では、2年時および3年時における演習や調査経験を踏まえつつ、各ゼミ生が本学部本学科で学んできたことの集大成として、卒業論文をまとめてほしい。

【評価方法】

出席（40%）、授業への参加姿勢（20%）、調査成果・論文評価（40%）。卒業論文の内容はもとより、各ゼミ生の出席および演習への参加姿勢を重視して総合的な評価を行う。

【テキスト】

演習のなかで適宜紹介。

【参考文献】

演習のなかで適宜紹介。